真・恋姫†無双～無敵の神の御使い～

キョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜無敵の神の御使い〜

【Nコード】

N10950

【作者名】

キヨーン

【あらすじ】

日本には、とある男がいた。神出鬼没、無敵と称される男
空崎刀海。自由気ままに歩いていた彼はある日、謎の少女に出会
い……………。

真・恋姫十無双の二次元チート物語です。超駄文ですがそれでも構わない方は前にお進み下さい。いやそれは……と言う方はブラウザの『戻る』か、携帯の方は左をポチッとどうぞ。

不定期更新の為、間がかなり空きます。故に短いです。どうか、生暖かい目で見守って下さい。

感想等是非お願いします。

因みに作者ですが、ガラスのハートの持ち主です。キツいが来るとめっちゃ凹みます。

それでは、前置きはこれぐらいにして。どうぞ、お楽しみ下さい！

主人公設定（前書き）

、 1 0 、 1 0 、 3 1 修正

主人公設定

人物紹介

ソラザキトウカイ
空崎刀海

183cm

69kg

黒髪黒眼。髪は短髪。

体格は中の上で普通よりは良く鍛えてるかなあぐらいの筋肉量に見える。

全ての格闘技を常人を遙かに超える域まで極め、武術では無敵と謳われている。一番得意なのはカンフーと合気道。

歴史に関しても無敵。

特に三國志や戦国時代には専門家を凌駕する。

その辺りの話をさせると止まらなくなるのが普通。

歴史以外に関しては知能が皆無。敬語は使ったことなど無く、人当たりが荒削り。

中身はイイヤツなので仲の良い人は多くいる。

よく戦国時代などの時代に行きたいと考える凄い人。

歴史に関しては、ゲームやラノベ、映画まで網羅してるためいつも

話題は尽きない。中身も全て記憶したとか（本人談）

第0話 無敵、転生すること（前書き）

注意書き

この小説は作者の自己満足により書かれています。駄文でもよろしい方はこのままお進み下さい。

第0話 無敵、転生すること

「うう〜……頭いてえ……」

漆黒の足首まである長さの羽織を身に纏う男が、頭痛を訴えながらとぼとぼ歩いていた。

彼は昨日の酒宴により二日酔いに。

丁度、大阪にいた時に会った旧友に「一緒に飲もうや！」と誘われ、結構飲んだのだ。

旧友というのは共に武術を習っていた者達で、彼らも強い。見知らぬ顔触れもいたが、武術ということ得意気投合。すっかり仲良くなり、皆で笑った。

そして、翌日の今に至るわけだが、いつもより多く飲んだ彼は立派な二日酔いになり、ふらふらと街を出歩いていた。

「お！刀さんやんか！久しいなあ！」

ひょこつ、と脇道から顔を出してきたのは一人の女性。ショートカットの黒髪を揺らして、男へと近づいた。

「ああ、お前か。久しぶりだな。何年ぶりだ？」

「三年ぶりや。刀さんは、相変わらずやなあ」

「はっ！俺は、武術と歴史しか取り柄がないからな」

刀さんと呼ばれた男は、突然現れた女性と和気藹々と話始める。

「どうや、武術の調子は？」

「どうだろうな。そっちこそ、前より強くはなったよな？」

「当たり前や！ウチ、今までとは全然違っでえ！」
「そうか。なら、勝負するか？俺も、酔いを醒ましたいんでな」
「オツケー。じゃ、道場で勝負や！」

＋＋＋＋＋

場所はとある道場。周りの観衆の中央には、二人が対峙している。
羽織を纏う男と、棒を構える女性だ。

「刀さん。コートは脱いだほうがいいんちゃうか？」

「……コートじゃないんだがな。まあいい。そうさせてもらおう」
バサツ、と羽織っていた物を取る。

露になったその服装。それは、日本の和装であった。

藍色の上着に、漆黒の袴。そして、下駄。

これに刀を持たせれば武士に見えるだろうが、生憎そんな物は無かった。

「ヒュ〜。かつきーやんけ。ウチはそういつの、好きやで」

「これが普段着でな。一番落ち着くんだ」

「世界一の日本人やな。ほな、行くで！」

ダンツ、と地面を蹴り、距離を一気に詰めて棒を顔へと突き出す。男は、首を傾けスレスレで棒を避ける。それと同時に女性との間合いを潰した。

男が得意とする『合気道』の入り身と呼ばれる動きだ。

ゼロ距離になった瞬間、女性は反転し、両腕を掴まれて俯せに倒された。

「ちよつ、合気道なんてズルい！」

「あれ？ダメか？」

「ダメやダメや！適うワケないやろうがッ！」

「あー、わーったわーった！次はちゃんと違うのでやるって！」

「よしッ！約束や、行くで！」

拘束を解かれた瞬間、ブオンツ、と音をたて女性は横風ぎに棒を振るう。左からの一閃に、男は退いて躲した。

立ち上がった女性は、速さだけを活かして棒を突き、振るう。男は捌きながら順調に躲していった。

再開されてから数分。

男が動きを見せる。

女性は突きの連打を放った。

捌いて躲す男は、一本一本をしっかり見ていく。

刹那、男の胸へと鋭い突きが迫る。男はすぐに身を捻って左半身を退いた。棒は空を突き、目標を失う。

男は、まだ勢いのある棒を左手で掴み、その勢いそのままに左手を無力で引いた。

「!?!」

勢いに吊られ、女性は棒を掴んだ状態で宙に浮かされた。

男は、空中で無防備な女性の後ろ襟を右手で掴んで、地面へ叩きつけようと腕を動かす。

「……負けや」

「よろしい」

しかし、女性の顔は、地面スレスレで止まった。

「結構、強くなったな」

「なんや。ウチなんか刀さんの動き、全く見えへんかったわ。やっぱり、『無敵の刀海』の異名は伊達やないなあ」

「何、そんな異名があるのか？」

「せや。かなり知名度高いで。照れとるんか？」

「いや、何とも思わん」

「ふうん、そうかい。……それより、早よう起こしてくれや」

「おお、すまんすまん」

女性を起こし、羽織を持ってから男はスタスタと入口に向かう。

「もう行くんか？」

「ああ。この空崎刀海、今は旅の途中だ。そのうちまた会えるんじゃないか？」

「アツハツハ！確かに神出鬼没とも呼ばれるワケや」

二人はカラカラと笑い合う。

「じゃ、またな」

「おーきにー！」

男 刀海は、片手を上げて部屋を出た。

「流石は槍術世界一。一筋縄では如何な」

刀海は、清々しい気分で呟いた。

「……………名前って、刹那でよかったっけ？」

一方で、軽い不安も心に残っていたのだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「コンビニはどこだ？」

時間は昼時。

刀海はコンビニを求め、大阪の街を闊歩していた。

「貴男が空崎刀海ね？」

「……………は？」

「そのまんまよ。貴男が神出鬼没『無敵の刀海』と呼ばれる人ね？
ってこと」

「あ、ああ。そうだが……………」

刀海は突然の呼び掛けに動揺しながら受け答えをする。

仁王立ちして刀海を見上げる形になっている人は、白のワンピースに金髪金眼の美少女。もの凄い目立つ筈なのだが……………周りの人間は見えていないかのように歩き去って行く。ここ一帯を避けるよに、それでも二人の存在に気付いてないように。

明らかに狂っている。

「……………何者だ、お前。それに、この空間も。只者じゃあないな」
「凄いでしょ？兎に角、貴男を強制送還しなきゃいけないの。上司の命令だから」

フフンツ、と鼻を鳴らしそこそこある胸を張る。

「……………面白い。一体どこにだ？」

表面上は笑う刀海だが、殺気は全開で身体から放出させていた。

しかし、それに怯むことなく意味不明の少女は意地悪く、気味悪い笑みを作った。そして、こう言った。

「異世界よ」

刹那、刀海の視界は歪み、ブラックアウトした。

周りには、樹。

それ以外に何一つ存在しない。

不気味な程清々しい林が二人の人物を囲んでいた。

「……………こんな林に強制送還たあ、どういうことだ？」

「まあまあ、そう急かさずに。ちゃんと説明するから」

空崎刀海。そして、彼が出会った謎の少女であった。

「貴男は今、後漢の時代に来てるわ」

「……………後漢……………つまり、今の中国か」

「そう。やっぱり、歴史に関しては頭の回転が早いわねえ」

「……………それよりだ。まず、俺をここに来させた理由を言え」

「むう、神様に向かって命令口調とは。生意気ね」

「こっちなんか、勝手に連行されていい迷惑だ」

「……………ハア……………はいはい。わかったわ。理由はたくさんあるけど、

まずは一つ。実験よ」

「実験……………？」

神様ともあろうやつが実験？　と思った刀海は、言葉を復唱した。

「まあ、あれよ。人を転生させたらどうなるのかなあ、なんてことになって、過去に翔ばすには貴男が適任だと思われたのよ。上司もそう言ったわ」

神様に上司なんているのか……。

「私が喋れるのはここまでよ」

「ちよつと待ていッ！たくさんあるとか言っておきながら一つしか言っつてねえじゃねえか！」

あまりにも期待外れな理由だけに、刀海は思いつきりツッコミを入れた。

「大丈夫よ。後で説明してくれる人がいるから。……………そうそう。この世界での貴男は、姓は蒼、名は神、字は夜宏って答えてね。ちなみに真名は刀海よ。それと、今の貴男は不老不死。役目が終わったらそうじゃなくなるけど、それまでは絶対に死なないから。身体能力とかいろいろとパワーアップしてるから、存分に楽しんで。じゃね！」

言うだけ言っつて、自称神様は消えた。

「……………もうツッコミは入れんぞ。まずは状況整理からだ」

刀海は、歴史以外に能の無い頭を精一杯フル回転させた。

『今、現時点でわかっていること』

- ・ここは異世界。
- ・時代は後漢辺り。
- ・場所がわからない。
- ・真名という機能がある世界であること。
- ・自分は不老不死である。
- ・神様の実験（という名の気紛れ）で無理矢理来させられた。

・何やら自分は以前よりパワーアップしているとなかんとか。

ピンッ、と四つ目の情報に刀海は閃いた。

「真名があつて後世の中国。後漢といえは、すぐに三國志。つまり、

……『恋姫十無双』?!?!?」

何故だああああああ!!!!!!!!!! と、刀海の断末魔が空に響き渡った。

第1話 蒼神、孔明と鳳統に出会うのこと（前書き）

続けて投稿。ヒロインに接触します。

第1話 蒼神、孔明と鳳統に出会うのこと

深い木々に囲まれた細い一本道は、静かに霧を漂わせていた。数メートル先すら見えない程濃いものだ。

そんな中、野宿を望まない刀海は神を恨んだり褒めたり。強制送還されたのはいい迷惑だが、まあこの世界なら結構楽しめそうと樂觀していた。

「こりゃ参った。どっか泊めてもらえねえかなあ……」

半ば諦めながら歩を進めていると、かなりおんぼろの橋の前で少女が蹲っていた。

「そこのお嬢ちゃん、どうした？腹痛か？」

様子が気になった刀海は、後ろから優しく声を掛けた。

「ひ、ひゃいッ!？」

かなり驚いたのか、少女は嘔みながら振り返る。

……………どっかで見たな。

「はわ、はわわ!わたしは、しょ、その……………諸葛孔明でしゅッ!……はわわ、嘔んじやった……………」

嗚呼、あの孔明ね。今何才だ？ どう見ても六歳ぐらいにしか思えない。

ま、いいか。孔明なら、ここで怖がっているのが納得がいく。

「孔明か。おれは、姓は蒼、名は神、字は夜宏。蒼神と呼んでくれ。……さて、大体の事情はわかった」

橋は一人じゃ怖いんだろ？

「さ、渡るぞ。俺が手を引いてやる」

ゆっくり手を差し出すと、躊躇いながらも小さな手で刀海の手をそっと握った。

「よし、行くぞ」

歩調を合わせ、一歩一歩ゆっくりと進んで行く。

「……………」

孔明は、ギョツと手を握って震えながらも歩く。既に涙目だ。

「もうちょっとだ。頑張れ」

刀海もしっかり握り返し、先導して橋を渡った。

そして、何倍もの時間を掛けようやく渡り切ったのだった。

「こ、怖かったですう」

渡り終えた途端、孔明は泣きじゃくりながら刀海に抱き付いてきた。刀海は、よく頑張ったと頭を撫でながら宥めた。

＋＋＋＋＋

無事渡った二人。孔明の方は極度の緊張から力が抜けたのだろう。立つのもやっとの状態だったので、刀海が背負って行った。

孔明は私塾で生活しているらしく、案内されながらようやく辿り着いたところだ。

行くまでの道中、真名も預かった。孔明は朱里と名乗った。助けていただいた恩人だからそれくらいと、孔明の方から振ったのだった。

……アレは助けたにはいるのか？、と若干引っ掛かったが、まあ有名人に会えただけ良しとする、というまたまた楽観的な理由で刀海も真名を預けたのであった。

「誰か、いるか？」

門の外から中へと呼び掛ける。暫くすると、中から一人の女性ととんがり魔女つ娘帽子を被った少女が出迎えてくれた。

「お客様ですか？」

「ああ、そうなるかな？取り敢えず、お連れさん連れてきていた」

そついいながら、背中の朱里を見せた。今はスヤスヤと熟睡中だ。

「あらら、これはどうもすみません」

「いや何。どうってことはない。困っている人を助けるのは人として当然の行いだ。取り敢えず、早く楽な場所で寝かせてやらないと」
「そうですね。では、こちらへ」

案内され、刀海は中へと足を踏み入れた。

「これでよしと」

朱里を寝かせた刀海は、別室で待つ二人の元へ向かった。

＋＋＋＋＋

「へえ、水鏡殿はここで私塾を？」

既にわかりきっていることだが、話がしたいのは仕方がないのだろつか。やはり、雑談というのは楽しいものだ。

「はい。この子もそうなんです。かなり人見知りですけど。ほら、

「ご挨拶」

へえ、と相槌を打つてとなりの少女を見る。いきなり振られて困っているのだろう。かなりあわあわしている。

「あわわ……その、ほーとーでしゅッ……あう……」

恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にして帽子を深く被ってしまった。

なんて言うか、守ってあげたくなるのは自分だけだろうかと思える刀海であった。

(いや、多分支持者はかなりいると思うb y作者)

ん？今のは天の声？

まあどうでもいいか。

暫くの間、楽しく雑談をした後、刀海は席を立ったが夜も遅いから泊まって良いと言われ、その言葉に甘えさせてもらった。

+++++

お風呂も先にいただき、前世では見られなかった綺麗な夜空を眺めていると、後ろから声を掛けられた。

「蒼神さん、雛里をお願いできますか？」

「雛里……鳳統ね。わかった」

「ありがとうございます。ほら、雛里。蒼神さんに本でも読んでもらったら？」

「……せんせーとがいい……」

「ごめんなさいね。さっき朱里が起きたからそっちも見なきゃダメなの。後で行くからね。それでは、お願いします」

「どーんと、お任せあれ」

胸を張って刀海は言った。

「ほら、行くぞ」と笑いながら手を差し出すと、顔を赤く染め躊躇いながらも弱々しく手を握った。

+++++

鳳統と二人になった後、刀海は取り敢えず平家物語を聞かせた。というか、この時代だとまだ武士出てないし。それでも結構喜んでくれたから良しとする。

全てを語り終わった時、鳳統は刀海の膝の上で寝息をたてていた。その後、パチパチと小さな拍手が聞こえてきた。

「お上手ですね」

扉を開け顔を出したのは水鏡と朱里であった。

「なんだ、聞いてたのか」

「はい。最後の部分ぐらいからですが」

「刀海さん凄いですッ」

水鏡は優しく微笑み、朱里は目をキラキラ輝かせていた。

「それほどのことじゃあない。今度書物にでも纏めてやるよ」

「わああ！ありがとうございます！」

「はははっ。どういたしまして。取り敢えず静かに、な？」

石鹸の優しい香りのする髪を撫でながら笑い掛けた。朱里は頬を赤に染めながら俯く。

(…………え、笑顔は反則ですっ)

「ささっ、もう夜遅い。夜更かしは良くないぞ」

最後に朱里の額を軽く小突いて、「おやすみ」と言った。

「何から何までありがとございます」

「いやいや。雑作もない事だ。このまま任せられもいいぞ？」

「…………それじゃあ、お言葉に甘えて」

「おう、どーんと任せろ」

グツと親指をたてて刀海は返した。

「それでは」

「おやすみなさい」

「おう」

二人は一礼して部屋を出て行く。

少し冷えた夜空から降る月光は、深い闇の中に溶けて行った。

第1話 蒼神、孔明と鳳統に出会うのこと（後書き）

感想等お待ちしております。

第2話 蒼神、完成させるのこゝ(前書き)

日常パートであります！

第2話 蒼神、完成させるのこと

東の空が白けはじめた頃。小鳥達の爽やかな優しい鳴き声が遠くから聞こえ始める。

水鏡塾に偶々訪れてから一晩開けた今日。刀海は朝から鍛練に励んでいた。

「……………フツ……………フツ……………」

今彼が行っているのは、片手倒立の腕立て。足には100kg以上はある岩を乗せてやっている。どこの岩なのかは触れないでおう。

「……………フツ……………後……………十年……………以上か……………」

十年。

刀海はそう行っただ。

今、朱里達は幼女。昨日の雑談中に聞いたが、彼女らはまだ五、六歳。ゲームでは、みんなが十八歳以上であった。つまり、物語が始動するまでは後十年以上待たなくてはならない。

もっとちゃんとした時期に飛ばせよコノヤローと自称神様（という名のクソヤロー）に怒鳴り付けたい気も山々だが、生憎全然連絡がとれない。ここは諦めるしかなさそうだ。

「……………ハア……………まっただ……………」

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もついには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ……」と。やっぱり冒頭部分は大事だねえ」

平家物語の冒頭を書きながら刀海は呟く。

朝の鍛練を終えた後、彼は約束の平家物語を纏めていた。普通、こんな地域の字などわかるはずもないのにさらさらと読み書きが出るものだから驚いた。習ってもいないのに、と思っただが、多分自称神様（という名のクソヤロー）が手を廻してくれたに違いない。そう信じよう。

「刀海さん、ご飯出来ましたよ」

暫く熱中していると、不意に後ろから声がした。

「おう、朱里か。すぐ行く」

続きは後で、と筆を置き場所を移動する。朱里とは手を繋いで向かった。せがまれてこうなったのは言うまでもない……わけないか。

兎に角そついつことである。

十十十十十十十十十十十

唐突にだが、暫くの間水鏡塾に滞在することになった。二日三日程度ではなく、数ヶ月から一年ほどだ。

理由は主に朱里と雛里（既に真名は交換済み）からだつた。取り敢えず『一緒にいたい』だそうだ。本人も、二人に涙目＋上目遣いで言われた為、承諾してあげた。（決して涙目や上目遣いに弱いワケではないが、そういう姿を見ると可哀想で仕方がないのだ）

「こりゃ、楽しい毎日が送れそうだな」

まあ、本人がいろいろなら、ねえ？

十十十十十十十十十十十

本日、刀海離里ペアは山菜積みに。ルンルン気分の離里に対し、朱里の方は軽く不機嫌だったが、全く気付く者はいなかったのかなんとか……。

「……さて、のんびりやろうか」

橋を渡り、暫く歩いてから薬草等を積み始める。

……

……

……

暫し無言タイム

……

……

……

「よしよし。結構収穫は良いな。離里はどうだ？」

「私もいっぱい採れました！」
「おお、よく頑張った」

嬉しそうに笑う雛里を刀海は褒めながら撫でた。

「……えへへ」

雛里も気持ち良さそうに目を細め、至福の一時を味わった。何よりも、大好きな人とこうしてふれあえることは彼女にとって一番大切な時である。幸せな時間を長く過ごしたいのは誰だって同じだ。

と言ってもいずれ終了してしまうのもこれまた運命。常識と言ったところだろうか。

「じゃ、そろそろ行くか」

「はいッ」

頭から手は離れてしまいが、雛里はすぐに刀海の差し出された手を握る。

二人だけの時間が終わるのは幾分か避けがたいことである。が、いつまでも帰らない訳にはいかない。

それに、今回が最後であるのではない。数は限られるが、まだ何回も二人で出られる機会はある。

またその時に楽しめば良いのだ。

それに、家族ぐるみの付き合いをしてきた人達と一緒に過ごすのもまた違った楽しみと嬉しさがある。

(二つの至福の時を過ごせる私は幸せ者)

この生活が永遠に続けばいい……雛里は朱色に染まる西の空を仰ぎ見た。

山と夕日の景色は、優しく二人を包み込んだ。

十十十十十十十十十十十

帰って来て早々朱里に絡まれた。

数年間会えなかったかのよいに顔を輝かせてべったりくっついた。雛里も便乗し、刀海は口々に平家物語を纏められなかったとか何とか……。

「……なんて言うか、愛で疲れた、とでも表現しようか……」

朱里と雛里の父親的、兄的な存在となった刀海は、何故か精神的に疲れていた。

そのまんま、幸せ者だと言っておこう。

「あー………平家物語は明日でいいや……」

欠伸を堪えながら刀海は寢床へ向かう。

「……んむ？」

さあ寝るぞー、と布団をはぐる。するとそこには先客が一名。

「……何故雛里？」

布団の中では在ろうことか雛里が気持ち良さそうに寝息をたてていた。

部屋を間違えたのか？とも考えたが、自分の家のような所で部屋を間違えるのは有り得ないと結論が出た。

よって、彼女は刀海に用があつて来たに違いないと確信した。恐らく、待っている間に眠気に負けたのだろう。

刀海は優しく頭を撫でる。

流石に邪魔をするのも悪いと思い、微睡みの中刀海は寢床近くの椅子に座り深い眠りに落ちた。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

… LOG IN …

白く何も無い空間。

……夢だろうか？

前を見ると、金髪金眼の少女がニコニコ笑いながら立って（浮いて）いた。

「ハロハロ」

「おお、お前はいつぞやの自称神様（という名の塵）」

「……酷い、神様なのに罵倒された」

ずーん、と効果音が鳴りそうなくらい落ち込んだ自称神様（という名の塵）は涙目で手を着く。

「さて、もっと罵ってやりたいとこだが……何か用があるんだろ？」

「うう……そうだけど……貴男がそんなこと言うなら言わない」

「あつそ。じゃあ、俺は帰る」

スッ、と立ち上がって現実へと浮上しようとする。

「あつ、待って！喋る！喋るから行かないでえ〜！」

……泣いて縋り着いて来たよコイツ。

こつこつ姿を見るとどうしても助けたくなくなるのが刀海という男。
一つ大きな溜息をしてから自称神様（想像におまかせします）を見る。

「……わかった。話程度ならいくらでも聞いてやる」

「ホントッ!？」

「ああ。その代わり、今現時点で話せることを全て包み隠さず話せ。後で話し忘れたとか言ったら……」

「……言ったら……?」

「……お前を『自称神様（神失格）』と呼ぶ」

「全力で話ささせていただきます!！」

ビシッ、と敬礼をする自称神様（普通）。評価もまですまです。良かったと言えば良かった。

+++++

「んで、話つてのは？」

「ん、それは、ご都合主義の作者がいろいろな能力をとか設定をプラスしてくれるみたいなの」

「ほっ」

「で、それがこれ」

・不老不死

『役目が終わった後も暫くは生きれる。年数は作者次第』

・最終奥義《超大玉轟気弾》

『頭上に超巨大な球を作り出し、それを当てる攻撃。溜めるのに時間がかかる。ドラゴン ールの孫 空の元 玉のイメージでOK。気などは関係なく、無限に大きくなる』

・《気》 について

『人の生命エネルギー。身体能力を高めたり、その気を使って相手を攻撃したりも出来る。爆破も可能。剣や槍を作り出すことも出来る。兎に角応用が良く効く。気を消費すると、一時的に体の調子が悪くなる。これは、生命エネルギーであるものを使った反動である。なにもしなくても自然に回復する』

「だつてさ」

「成る程、チートだな」

「だね」

現実的には使い方なども詳しく話しています。その辺は省いて行きますので。

＋＋＋＋＋

「それじゃ、以上ッ！」

一通り聞き終えた刀海は、フウと小さく息を吐いた。

「うし、じゃあ帰る」

「あれ、もう行くの？」

「ああ。いつまでもこのこ寝てるわけにはいかないしな」

体がゆっくりと現実には浮き上がる。

「あ、そうだ！今の私の評価は！？」

「自称神様（普通）だ。良かったじゃねえか。ま、次会う時はどうなるやら……実に楽しみだ」

ククッ、と小さく喉を鳴らし、刀海は空間から消えた。

… LOG OUT …

薄く目を開けると、そこにはまだ熟睡中の雛里が目に入った。相も変わらず気持ち良さそうである。

刀海は立ち上がり大きく伸びをし、首を回した。骨が気味の良い音をたてる。

「さて、続きでも書くか……」

机に向かい、筆を執る。

後少しで完成する平家物語を刀海は夢中になって書くのだった。

「……で、何事も無く完成と……」

「オチはどうなるんですか？」

「朱里、多分それは無い」

第2話 蒼神、完成させるのこと（後書き）

ご感想等よろしくお願いします。

第3話 孔明、蒼神と短き旅すること（前書き）

短いだよ。

第3話 孔明、蒼神と短き旅すること

遡ること数週間前。

ある一人の占い師が一つ、予言をした。

『漆黒の装束を身に纏いし者、流星に乗りて降り立ち乱世を静めんとすること』

その数日後、昼の空に一つ流星が駆けた。

『予言は本当だったのか？』

流星を見た者達は口々に言う。

『確認が必要だ』

彼の者達は直ぐ様散策を開始。国中が湧いた。

しかし、彼らは漆黒の装束を纏う者を見つけることはなかった。

一方で、また不思議な現象が起こっていた。

彼を探しに出た者達の失踪だ。

漆黒の装束を纏う者。恐らく彼は『神隠し』
いつしかそのような噂が国中に広がり、たった数カ月後には彼が
皆に恐れられるようになったのであった。

国中では出かける時、皆決まってある言葉を言う。

『……神隠しには、気を付ける』と……。

+++++

「ちよいと一週間程そこら辺見てくる」

実に唐突に刀海は言い放った。

「周りの様子がどうも気になってな」

これが理由。

単純つて言えば単純。故に奥深かった。

「最近、嫌な感じがする」

彼は不穏な空気を誰よりも悟っていた。他三人は全くもってわかっていない。

恐らく、誰も知らないところで争いが起きている。それも、すぐ近くで。

「なあに、街とかの情報を探るだけだ。心配しなくても帰って来るさ」

バサツ、と漆黒のマントを纏う。

三人は不安を拭い切れない顔で刀海を見た。

刹那、朱里が一步前に入る。そして、

「あ、あの……私も、行かせてくれませんか？」

決意の籠もった意志のある瞳で言った。

「……………」

刀海は、鋭い視線で朱里を射ぬいた。その瞳にはいつものような優しさは微塵も無い。

雛里はその冷たい視線に怯え水鏡にしがみついた。

しかし、朱里だけはその瞳をしっかりと見返した。朱里自体、微かに震えている。怖いのだ。

だが、これは脅し。朱里は試されているのだ。その意志を、その勇気を。

暫く睨み合った後、フツと刀海の表情はいつもの穏やかなものに戻った。

「……合格。同行を許可する。よく頑張った」

彼は頬を緩ませ、優しく微笑みながら朱里を慰めるように抱き寄せた。

「はう……」

朱里はそのまま体重を全て預け、力なくへたり込んだ。後ろで様子を窺っていた二人もホツと胸を撫で下ろす。

「……朱里の準備が出来たら出発する。さっき言った通り、期間は七日間程度だ。日数は変わるかもしれないんが安心してくれ。必ず帰る」

+++++

「……それじゃ、ほんの少しの間だがお別れだ」

「あう……兄様……」

雛里は悲しい顔をして刀海を見上げた。

刀海を『兄様』と呼んでいるのは、兄妹の契りを結んだからだ。

「すぐ帰るつつつたる？ほら、大丈夫だ」

ぼんぼんと背中を叩きながら雛里を包む。

「じゃ、またな」

最後に強くキュツと抱き締めた後、ゆっくりと腕を解き入口に立った。

「よし。朱里、行くぞ」

「はいッ！」

待っていた朱里に声に掛け、二人に振り返る。

「行って参ります！」

「朱里ちゃん！気を付けてね〜！」

「お気を付けて」

「おう、行ってくらあ」

片手を上げ階段を一段一段しっかりと下りて行く。

「……一足先に、暴れようか……」

刀海はまっすぐ先を見据え、未来の行く末を楽しげに傍観した。

第4話 蒼神、噂を正すのこと

水鏡塾から幾場か遠く離れた場所。そこには小さな村が一つ。刀海と朱里はそこを訪れていた。

「……噂、か……厄介すぎる。後々俺が不利になる。早く変えないとだ」

毒づきながら刀海は村を見渡す。

彼の漆黒の羽織は、噂の『神隠し』と同じものようで、この村に来るまでの間商人に会ったが、彼も羽織を見て走り去って行ったのだった。

刀海も流石に羽織は脱いでいる。これ以上避けられるわけにはいかない。

「………先ずは汚名返上名誉挽回全力投球あるのみ！」

三つ目はともかく最初と二つ目は重要だ。先ず、『神隠し』を直し、着々と知名度を上げて行く。その内、それなりの異名が付くに違いない。なるべく良いものを、物語の始まる十数年の間に作り上げなければならぬ。それが、刀海の最初の使命だ。

「最初に村長さんの所ですね！」

よしッ、と気合を入れる朱里。

因みに彼女には自分が異世界から来たことは話した。最初はかなり驚いていたが、もう慣れたもの。気になど全く止めていなかった。

村長宅に着くと、刀海は早速『神隠し』について質問した。そして、返ってきた返事はこうだ。

金目の物を置いて行かなければ殺される、というものだった。

「酷い者です。村人も数人巻き込まれ、今は迂闊に外を出歩けない日々。このままではいつか滅びてしまう……」

彼は顔を伏せた。

そんな時こそ、刀海は燃える。

「『神隠し』。俺が潰してやる」

立ち上がり、静かに言った。

その様子に村長は酷く驚いていた。

「そんな……無茶な……」

「フン、なんなら山賊もついでだ。狩って来てやる」

刀海は焦る村長を残し、扉へと向かう。扉を開けようと手をかけた後、振り向かずに行った。

「……いつかここに手紙が届くだろう。その時を待て。それと、手紙が来たら『神隠し』はただの悪戯。本当の御使いは、乱世を。そして、全てを静める為に来た、と噂を広める」

「貴男様は、一体何者……？」

「俺か？俺はなあ、……」

本物の天の御使い、とても言っておこう。さらばッ！」

言っや否や刀海は羽織を羽織り、走りに走った。

「……さて、俺の名を恥かせておいて、ただで済むと思っなよ…
…」

少しキレ気味の刀海は深い森の中へと駆けた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

『神隠し』

巷では、とても阿呆らしい噂がたっていた。

金目の物を狙う悪徳者。

実に馬鹿馬鹿しい。

呆れた刀海は、大きく息を吐いた。

「酷いですよね。勝手に噂を利用して得をしようなんて」

「そうだ。だから、かーなーり重い罰を壊れるまで受けてもらおう」

その時の顔は明らかに悪魔でした、と共にいた朱里は語る。

「さっさと黒幕を……………っと、どっやらお出ましようだ」

刀海が不意に足を止め、前方を睨む。そこには漆黒の羽織を着けた者がいた。

「……………神隠しになりたくなければ、全て置いて行け」

謎の男は威嚇するように言い放つ。しかし、刀海は動じること無く男に返した。

「馬鹿馬鹿しい。何が神隠しだ。偽神隠しの間違いだろ？ 待ってる。すぐに本当の神隠しに会わせてやる」

刀海が一步を踏み出したその時、

「全員撃てえいッ！」

周りに潜んでいた者達が一斉に矢を射かける。

「……………フン」

刀海はその場を動かない。そして、一本の矢が彼に当たる寸前、何かに弾かれた。

『『『!?!?』』』』

その後の攻撃も全て弾かれてしまった。

「……ふむ、気は良好だな。さて、次はこっちから行くぞ」

彼が右手を翳すと、その手にはいつの間にか一振りの漆黒の太刀が握られていた。

軽く地面を蹴り、左側にいた者達に肉薄。腕を振るい、三人の胸を浅く斬り付ける。

苦痛に声を上げて、三人は倒れる。

「……せいぜい悶え苦しんで死ぬがいい」

刀海はキツく吐き棄て、また別の方向へと走った。

次の相手は二人。殆ど同じタイミングで矢を放って来た。

刀海は軽く身を捻って躲し、二人の首を胴から斬って離れた。

その後も、軽々敵を残滅し、最後にリーダーらしき人物を一人残す。

「……き、貴様…何者だ!？」

どうやら足が竦んでるご様子。動けないようだ。

刀海は一回、フツと笑い冷たい視線を向けて言った。

「……俺こそが、本物の天の御使いだ。神隠しとやらの適当な噂をよくも広めてくれたな。あの世で人の名誉を傷付けた事、一生後悔するがいい」

言いながら、また手を天に翳した。すると、蒼い光の球が少しずつ出来上がって行く。

大きさが顔ぐらいになったところで、球の膨張は止まった。

「被害が広がらないように、この程度にさせてもらう。さあ、辞世の句を唱える。五秒やる」

男を睨み、刀海はカウントダウンを開始する。

「ヒイツ!?!」

恐怖を抱いた男は、踵を返して走りだした。

「……喰らえ、轟気弾」

サツと手を男へ向ける。刹那、蒼い光の球体は男へと一直線に飛んで行った。

「!?!?!?!」

蒼い光の球体は着弾と同時に弾ける。男は声にならない悲鳴を上げ、完全に消滅した。

「……朱里、平気か？」

刀海は茂みに向かって声を掛けた。

「は、はい。なんとか……」

がさがさと朱里が茂みから出てきた。多少ながら顔色が悪く見える。

「ついでだ。ここら一帯の山賊を残滅させる。行くぞ」

＋＋＋＋＋

今は山の中を移動中。一度村に立ち寄ってから山賊の居場所を聞き出し、現在はアジトと思われる場所に移動中である。

「……あの、刀海さん」

「何だ？」

途中、朱里が声を掛けてきた。

「さっきの矢を弾いたり、剣を作ったりしてましたけど、アレはどうやったんですか？」

ああ、アレね、と刀海は納得したように頷いた後説明を始めた。

「人には生命エネルギーである『気』がある。俺はソレを使ったワケだ。矢を弾いたのは自分の周りに『気』を出し、それをガチガチ

に硬めたつてこと。剣とかは、先ず頭ん中で形を具現化させ、現実
に『気』を使つて投影させたんだ。例えば、弓矢を想像すると……
ほら、こんな感じに出来上がる」

刀海が差し出した右手には、弓矢が一つ握られていた。きちんと
触れるようにもなっているし、弦もきちんと機能している。本物と
全く同じ弓矢であつた。

「……うわ、凄いです……」

朱里は弓矢を手に取り眺めていた。

しかし、弓矢は何の前触れも無く消えた。

「あ、あれッ？」

「おお、すまない。疲れたから消さしてもらつた」

「あ、そうですね。自分の体力を使つてしまふんでしたね」

朱里は納得、とつんつん頷いた。

暫く歩いた後、かなり遠くの前方に洞窟の姿が見えた。場所から
して山賊のアジトに違いない。

「……見張りは無し。余裕だな」

「真正面から行きますか？」

「ああ。朱里は安全な場所に隠れてくれ。俺が洞窟から出てきたら
お前も出てきていいぞ」

「わかりました」

そう言つと朱里はがさがさと林の奥へと消えた。

「さてさて、いっちょやりますか！」

刀海は意気揚々と中へと足を踏み出した。

十十十十十十十十十十十

山賊の数はおよそ800人。少々規模がある位だろうか。奴らがワイワイと集まっている中に刀海は悠然と現れる。

「なんだデメエは！」

山賊の一人が威嚇するように声をあげた。

「通りすがりの御使いだ」　いい終わると同時に近くの山賊に踊りかかる。

男の背後を取り、肩と頭を掴み、力でもって思いつ切り捻った。

「かッ………！」

ゴギンッ、と首から音がし男は地に伏した。

「ぜ、全員かかれえ!!」

突然の攻撃に怯み、リーダーと思われる男は声が裏返りながらも指示を出す。

槍や剣を持った者達が一斉に刀海へ向かって走りだした。

「……………」

刀海は無言のまま立ち尽くす。

そして、剣の切っ先が正に触れようとした時、刀海は身を捻り躲した。男が出した剣は、刀海と重なる位置にいた仲間の胸に深々と刺さった。

「……………おおおおおおお!!!!」

その間にも、大勢の山賊が刀海に迫る。槍を突く者、剣を振るう者。

しかし、その攻撃は全て、目標ではなく、仲間へと当たっていた。

「ぐう……………」

「……………がはあッ!」

「……………うう」

仲間同士を斬り付け、山賊の数はみるみる減って行く。

刀海は避けるのみで、全く打撃も投げも使っていない。躲すだけ。それだけで敵を残滅して行く。

そして、あっという間に山賊の数は30人を切った。

「ぐっ……くそ！全員で囲んで弓を使え！」

山賊は刀海を円の中心になるように囲み、矢を放つ。

しかし、矢は当たる瞬間刀海に全て捕まれてしまい、目標に到達することはなかった。

(動体視力も反射神経もかなりパワーアップしているな)

刀海は具合を確かめるように手を握ったり開いたりした。

「ば、化け物だ！」

囲んでいた者達は武器を取り落とし、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。

その全員に、刀海は捕った矢をプレゼントした。投げられた物は全て山賊の身体に命中。結果的にリーダー一人が取り残される形となった。

「時間がない。さっさと辞世の句を唱えろ」

頭上に蒼い光の球を作り出しながら言う。

「……ッ、この、化け物があッ！」

男は怯むどころか、剣を振りかざして刀海へと向かって来た。

「……山賊風情が……反省してろ」

スルリ、と男の一撃を避けた刀海は振り向き様に球をぶつけた。球は直撃と同時に弾け、男は跡形も無く消え失せていた。

「……食料と武具辺りをいただこうかな」

掃除を終えた刀海は奥へと歩を進める。

+++++

暫く進むと、倉庫の一步手前に地下へと繋がる階段を見つけた。

「……朱里には悪いが、少々探索させてもらおう」

「ごめんな、と胸の内で謝罪しながら刀海は地中深くに潜り始めた。

階段を少し降りるだけで辺りは全く見えなくなるほどの闇が広がっていた。

「……轟気弾」

刀海は小さく呟く。刹那、彼の頭上に蒼い光の球が現れる。

「……全く無いよりは多少マシか」

彼がわざわざこの技を使ったのは明かりを確保する為。多少とは言え、幾分かは闇の先が見えるようになった。

「……………む？」

突然、刀海は足を止めて辺りに耳を澄ました。

「……………人か？」

微かに聞こえた音を頼りに刀海は闇の奥底へ向かった。

第4話 蒼神、噂を正すのこと（後書き）

感想等お待ちしております。

第5話 村人、安堵すること（前書き）

短いです。すみません。

第5話 村人、安堵すること

奥に進む程囁くような声はだんだん大きく近くなって行く。

突き当たりまで来ると、一つの扉が堅く閉ざされていた。声はその中から絶えず聞こえてくる。

鍵を壊し、刺激しないようにゆっくり中へと足を踏み入れた。

「……こりゃまた酷い……」

闇の中にいたのは若い女子数十人。目に生氣は無く、かなりやつれていた。

「助けに来た。安心しろ」

刀海は穏やかに言い、一人一人の縄を解いて行く。

少女らは、ひっきりなしにありがとうと言ってきた。

刀海は笑顔で返事を返し、全員が解放されたところで外へと案内した。

出入口来ると、眩しい日の光と爽やかな心地よい風が肌を撫でる。久しぶりの外に出た少女らは泣きながら抱き合って泣いていた。

「刀海さん！」

喜びを分かち合う幸せそうな光景を見守っていた時、茂みの向こうから一人の少女が走って来たのが見えた。

「おう、無事帰ったぜ」

トテトテ駆け寄って来た朱里を軽々抱き上げる。顔には嬉しさと安堵からの優しい笑みが浮かんでいた。

「怪我はないですか？」

「一つも。当たり前だろう？」

「ふふっ、そうですね」

でも良かったですう、と朱里は刀海にキュッとくっついた。

「先ずは、彼女らの安全が第一だ。近くの村にでも送り届けた後、すぐに違うところの山賊を潰す」

「す、すぐですか？」

「ああ。期限が限られているからな」

「あ、そういえばそうでしたね」

朱里は思いついたように顔を上げた。

「さて、早く行こうか」

「はい」

刀海は朱里を一瞥した後、彼女らに向き直り、大声で言った。

「お前達を近くの村に送り届ける！しっかり付いて来てくれ！」

そこらから声が返ってくる。刀海の支持率は一気に上がったようだ。

うん、と一つ頷いた刀海は村へと歩きだした。

(……………村ってこっちで合ってたっけ?)

恐ろしく歴史以外に頭の回らない彼は、極度の方向音痴であった。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

朱里の案内を頼りに、無事村へと到着。本気で危^{ガチ}なかつた、と刀海は心の中で感想を述べ反省していた。

「ふいふ、良かった良かった。さ、次々！」

理想とする噂を広めるようにと告げた刀海は、次の目的地へと走り去って行ったとか。

数ヶ月後、彼の噂はあっという間に国中に広がっていた。

第6話 蒼神、憤慨すること（前書き）

うん（；；）

……………イマイチ。

第6話 蒼神、憤慨すること

数日前のことだ。

各地でまた新たな噂が広がりつつあった。

『神の御使い現る』

噂は一気に広がり、装飾までされていった。

『漆黒を纏う英雄』 『黒神』等だ。

山賊を蹴散らし、世に平和をもたらす使者として、彼の位は確定しつつあった。

勿論、それを良く思わない輩も多くいる。それらは、各地で村を襲い、どんどんと勢力を伸ばしていた。

+++++

旅を始めて一週間。

刀海と朱里は水鏡塾へと向かうべく、薄く霧の出始めた細道を歩いていた。

「はぐれるといかな。朱里、手を握つとけ」

刀海は手を差し出す。朱里も小さく頷き、握り返した。

旅も終盤を迎え、粗方の山賊等を片付けた刀海はまあまあ満足して帰っている。相手にした山賊の数は、十を有意に越えるだろう。

暫く歩いていると、霧も段々濃さが増してきた。足下に気を配りながらゆっくりと歩を進める。

暇になった刀海は口を開いた。

「アレか。ここら一帯はよく霧が出るのか？」

「そうですねえ。比較的、多く出るとは思います」

「成る程。前も霧が凄かったのは普通なんだな」

前を歩く刀海は納得したように頷いた。

一方の孔明こと朱里だが、刀海と手を握っている為体温が上がり、顔は真っ赤に。幸いにも霧のお陰で顔を見られずにすんだのだからホッとした。

「……………」

不意に刀海が立ち止まる。朱里からは表情が読み取れないが、明らかに何かに気が付いている。

「……………血の匂いがする……………」

消え入りそうな小さな声で刀海が呟いた。

「……えっ、何 ひゃっ！」

どうしたものと訊こうと声を掛けようとした朱里。しかし、その前に刀海が彼女を抱き上げ、それと同時に走りだした為、朱里は驚いたまま口をぱくぱくさせていた。

光の如く走る刀海はあっという間に水鏡塾の長い階段前に到着。朱里を下ろした後、彼は短く「三日」とだけ言い霧の奥へと姿を消した。

「……って、あれ！？刀海さん！刀海さ〜ん！？」

朱里が我に返ったのは、刀海が消えてから暫くたった後のことだった。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

時は過ぎ去り、とある村の一軒家。

そこからは怒声と悲鳴が交じりあった音が絶えず耳に木霊する。

「いいか、愛紗。この下から絶対に出るな。声もだすなよ」

中には一人の青年と黒髪の少女が。少女は青年に促され、寝床の下に隠れていた。

「兄者あ……」

「大丈夫だ。静かに隠れてる。そうすれば絶対にバレない」

最期に青年は笑い掛け、扉へと歩いて行った。

(兄者……兄者……！)

少女はギョツと目をつぶり、兄の無事を祈った。

『……くっ……このッ……』

遠いような近いような。感覚が薄れてきていたが、何処かから兄の必死な声が耳に響いた。

「ぐああッ！」

ダンッ、と音をたてて何かが近くで倒れた。

視界に見たくもない光景が映った。

血を流しながら倒れている兄がそこにいた。

気付けば、自分が声を出していた。

だが、もう遅い。

少女は敵　山賊の一味に引き摺り出された。

「ひっ、ひっ、ひ。すぐに楽にしてやるぜえ。可愛娘ちゃんよお」

気持ち悪い声で笑い、ギョロツとした大きい目で少女を睨む。口元には笑みが浮かんでいた。

男が剣を振り上げた。

「兄者ああああッ!!!」

+++++

時は一日遡る。

血の匂い。間違いかもしれない。しかし、刀海は放って置けず、気付けば自分が全力で奔っていることに気が付いた。

何十里も何百里も先の場所かもしれない。それでも、失われかけている生命がある。それを放っておく訳にはいかない。

「間に合えよ、コンチクシヨウ……」

野を越え山を越え、走り続ける。

突如、前方に血溜りが見えた。駆け寄ると、一人の遺体から流れ出るものだった。

「……惨い」

刀海は表情を歪めて言った。罪無き者を斬る山賊。哀しさと同時に抑えきれない怒りが噴き出してくる。

「……罪は……即刻死刑……！」

刀海は憤慨した。理性を棄て、大罪を犯した山賊を討つだけに行動する。最早、彼を止められる者はいなかった。

＋＋＋＋＋

一日かけて刀海は走り続けた。

そして、彼は見た。

燃え盛る家屋を。逃げ惑う村人を。笑い、罪無き者を斬る山賊共を。血を流し、倒れる者達を。

ふと、視界の隅にある光景が映った。

家から引き摺り出される黒髪の美少女。少女を引き摺る憎き山賊の一人。

男は楽しいとでも言わんばかりに笑い、泣き崩れた少女に向かい剣を振り下ろす。

「兄者ああああッ!!!」

いつの間にか、少女を庇うように動いていた。

一瞬 いや、半瞬にして少女へと近づき彼女を剣から守るように覆う。

ズツ、と胸の内に冷たい何かが入り込んだ。

「なっ、なんだよ、貴様……!?!」

男は急に割り込んできた刀海にビビり、後退さった。

刀海は違和感を感じながらも立ち上がった。

自分の体をよく見ると、胸に剣が貫通しており、血が溢れ出しているのが見えた。

「……貴様の処遇は、即刻死刑だ」

剣も構うことなく刀海は頭上に蒼い球を作り出す。身体位の大きさはなっただとこで、彼はそれを男に向かって放った。

一瞬にして、男はこの世から跡形も無く消え去った。

「……………チツ…クソが……………」

舌打ちをし、刀海はまた蒼い球を作り出す。

しかし、今度は大きさが尋常でない程巨大になって行く。

「……………ブツ潰す……………!!」

怒りを表にして刀海は腕を振り下ろす。

村より一回り巨大な球は全てを飲み込み、地を削った。

轟!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

強烈な轟音と風圧。そして衝撃破を巻き起こし、大量の砂を舞い上がらせる。

「……………フン」

刀海は周りに気で透明の障壁を作り上げ、被害を防いだ。

暫くすると砂埃は収まり、様子が現となった。

そこには村など存在していなかった。

目に見えるのは巨大なクレーター。刀海の攻撃は村を丸ごと破壊していたのだ。

「……………ッ……………」

胸の痛みにより、刀海は我に返った。いつの間にか剣は消えており、生々しい傷口から血が溢れていた。

不意に一人の少女が目にはまる。さっき庇った黒髪の少女だ。

「……兄者…兄者あ……」

少女は顔を埋め、ずっと泣いていた。

「……愛紗 いや、関羽か……」

フツ、と頬を緩めて刀海は黒髪の少女 愛紗こと関羽を優しく撫でた。

＋＋＋＋＋

「我が名は蒼神、字は夜宏。宜しく」

「蒼神様、今度は危ないところを助けていただきありがとうございます
ました」

元、村から少し外れた広場。

ここには、村人の生き残り（ほぼ全員が刀海の攻撃から逃れた者）

が集まっていた。

「人として、当然の行いをしたまで。礼はなどいらん」

老人の言葉に刀海はキツく返した。

最初は村を丸ごと破壊してしまい、罪悪感に厭いとわれた刀海であったが、村人からの感謝によりどうにか持ち直していた。

「……貴男はまさか…神の御使い様では……？」

突如、後ろで控えていた村の若人がおずおずと声を上げた。

「いかにも。俺がそうだ」

「おお！あの御使い様だ！御使い様が来て下さったぞ！」

湧いた。

多くの村人が救世主の登場に、歓喜の声を上げた。

「……御使い様……？」

刀海の膝の上にはいた関羽が小さく呟いた。どうした、と撫でながら声を掛ける。

「真名を……」

弱々しく、関羽が言った。

哀しみ。

彼女の心はそれに巣くわれていた。兄を失った哀しみ。肉親を亡

くしたその気持ち。救わなければならない。

「真名ね。俺の真名は刀海。お前を救う為、俺の真名を預ける」

関羽を優しく包み込むように刀海は告げる。

「……愛紗です。どうか、私の真名を受け取って下さい」

「ああ。この蒼夜宏、確かに受け取った。よろしくな、愛紗」

パアア、と愛紗の表情に一点の曇天もない笑顔が宿った。

「はいッ！」

愛紗の心に、一筋の光が明かりを灯す。

また一つ、大きな運命の歯車が噛み合い、動き出した瞬間であった。

第7話 関羽、武を志すのこと（前書き）

果てしなくビミョー！

それが作者の悩み。

早く本編入りたいなあ……。

第7話 関羽、武を志すのこと

「水鏡殿、今戻った」

門の前で刀海が扉を叩いていた。

「あら、刀海さん」

「すまないねえ、勝手に飛び出しちまって。危ないところだったんだ」

「いえいえ。また村を救ったのでしょう？それならば、貴男を責める理由などありません」

「そう言ってくれると有難い」

許しをもらい、ホツと胸を撫で下ろした。

「朱里と雛里は、外出中かな？」

「ええ。今丁度薬草積みに山に出ています」

「またナイスなタイムイングだな？」

「ないす？たいみんぐ？それはどういった意味なんですか？」

「おお、すまない。こっちの勝手な判断での言葉だ。深い意味はない」

「そうですか。しかし、いきなりいなくなるものですから、朱里も雛里も心配してましたよ」

「そっか。悪いことしたなあ」

ボリボリと頭を掻きながら刀海は苦笑した。

「実は、これからなんだが二月ふたつき以上帰ってこれなくなりそうなんだ。ちよいと野暮用だね。ここを空けることになるんだが、よろしいかな？」

「そうですね。私は十分に構いません。後は朱里達ですが……」
「いや。すまないが、朱里達には会わないで行こうと思ってる。朱里達によるしく伝えといてくれ」

「……わかりました。言っておきます。ただ……」
「ただ？」

「……朱里や雛里の為、必ず帰って来て下さいね？」

「そんなに意気になることはない。絶対に帰って来てやるさ」

口元を緩めた後、くるりと反対を向き、ゆっくりと階段を降りて行く。

「暫しのお別れだ。元気でな」

刀海は振り向かず片手を上げて去って行った。

十十十十十十十十十十十

今、愛紗達村人と刀海は村の復旧作業に参加していた。

「師匠！これはどちらに運べば良いですかッ！」

「ああ、それはそっちに纏めといてくれ。愛紗は働き者で偉い！」

「い、いやあ。そんな……」

褒めながらサラサラな黒髪を撫でると、愛紗は頬を赤らめ、俯き加減で身体をくねらせた。

「さ、頑張れ！」

「はいッ！」

ニッコリと微笑み、愛紗は木材を抱えて走って行った。

「……うん、普通にかわゆい」

父性愛により、笑顔に癒された刀海であった。

「蒼神様、こちらの方は……」

皆の頑張る姿に頬を綻ばせていると、太守の老人が声をかけてきた。

「えーっと……取り敢えず、その細かいのはここに置いてくれ」

「わかりました。いやあ、村を救っていただいたのに、復旧まで手伝っていただくとは……」

「いやいや、これぐらいさせてくれ。村を壊滅させた責任は殆ど俺なんだ。罪悪感に潰されちまう」

刀海はすまないと言いつつ頭を下げる。

「ああ、頭を上げて下さい。この二つと無い命を多く救っていただいたのです。それに比べれば、あんな小さな村には及びません」

「ははっ。そう言ってくれると有難いね」

太守もペコペコしながら刀海と苦笑し合った。

十十十十十十十十十十十

一週間後。村は新たに形を変え、一層たくましくなった。

頑丈な防護壁に、巨大な堀。物見櫓。中は補強された家屋。

とても一週間で出来るものとは思えない程の出来栄だ。……いや、一週間でも無理だろう。普通なら何カ月と掛かるに違いない。

何故一週間で出来たのか。やはり、刀海の働きが大きい。的確な指示と、自らの行動力。それらが合わさり、圧倒的な早さで終わったのだ。

「いやあ、ここまでするとは……流石は神の御使い様だ」

堅牢になった村を仰ぎ見て、太守は感嘆の声を漏らした。

「……ふむ。思った以上の出来だな」

刀海は顎に手を当て、感慨深く頷く。やはり、自分の力が通用し

たのが嬉しいのだろう。

「やりましたね、師匠！」

彼の隣では、愛紗が手を繋いでピョンピョンと跳ねていた。

「ああ。そうだな」

はしゃぐ愛紗を刀海は撫でてあやした。

キツキツと元気なままの愛紗を見て刀海は苦笑し、

「仕方ないな……落ち着けよ」

と呟いた後、後ろから包み込んだ。

「……………へっ……………？」

刹那、愛紗は動きを止めた。顔もどんどん真っ赤になって行く。

「あ……………ああ……………」

顔の次は身体中が熱を持ち、わなわなと震え始めた。

「どっこいしょ。やあっと落ち着いたか」

ようやく落ち着いた愛紗を刀海は抱き上げ、顔を覗き込んだ。

「ぶしゅー……………」

見ると、目を回して湯気を頭から出し気絶していた。

「……ほっほっほ。疲れたのだろう。休ませなければな
」
「そうか。じゃ、俺が休ませておこう」

愛紗を担ぎ直し、新たなる家へと向かった。

十十十十十十十十十十十

～愛紗～

『……紗……あ……しゃ……』

……… 兄者？

……… そこにいますか？

『……いし……あ……』

……… 兄者、どこですか……？

『あ………や………』

……… 行かないで下さい………！ 兄者………！

「……………」

兄者！行かないで！兄者！

「兄者あッ！」

「うえいッ！？」

……………あれ……………夢？

「……………かなりうなされていたな」

「……………師匠」

刀海師匠が私の頭を撫でながら、頬を拭った。

「……………大丈夫か？」

「……………師匠……………私、泣いて……………」

私は泣いていた。

……………あの夢だ。兄者の声が……………。

「……………兄者の……………声が……………ッ……………！」

「お前は、独りじゃない」

師匠が、包み込んでくれるように私を抱き寄せてくれた。

「大丈夫だ。今は俺が付いてる」

……凄く……暖かい……。

「……し……しよお……」

「……泣きたきや泣け。全部洗い流せ。好きなだけ、存分に」

私の中で堪えていた何かが、切れた。

「うわああああんツ！！！！」

+++++

どれくらい泣いていたのだろうか。

辛かった。

あんな賊に兄者を奪われて。

外面ではあんなに元気に振る舞っていたけど、やっぱり苦しかった。

大好きで、尊敬していた兄。

短い生活だった。

村の為に一生懸命だし、妹の私ともよく遊んでくれた。とても、

世話になった。

その兄がいない。

「……お前は強い。そして、もつともつと強くなれる」

隣で夜空を眺める師匠が言った。

「もつと強くなりたいんだろ？」

もう、誰も失いたくない。誰一人、失わせない。

私はまだまだ未熟者だ。

だからこそ、強くなる。そして、皆を守る。

それが、私のたてた絶対。

「師匠、稽古をつけて下さい」

「……その言葉を待ってた」

フツ、と一つ笑い、師匠がこっちを向いた。

「最初っから最後までクライマックスだ」

「……くらいまっくす？」

何て言っているのだろうか？ 聞いたことがない。

「よく知っておくといい。いきなり盛り上がるぞ」

成る程。

「はいッ！」

「いい返事だ！」

こうして、私の修行が始まった。

第8話 関羽、成長すること（前書き）

短いです。

ごめんなさい。

第8話 関羽、成長すること

この村に滞在して早一月^{ひっつき}。刀海は関羽こと愛紗の成長振りに感心していた。

成長とは、勿論武についてだ。

彼女の武器は偃月刀^{エモ}。槍で突くのととは違う、振るう武器だ。

最初こそ、初めて持つものだから全然扱えなかったが、体力や筋力、技術も早々と身につけあつという間に一人前にまで成長した。師匠である刀海が褒めると、そりゃもうスツゴク眩しい笑顔で喜ぶもんだから、刀海もついつい高い高いをしてしまふ。それをする度に愛紗は、

「こ、子供扱いし過ぎです!!」

と、顔を真っ赤っ赤にして叫ぶとか。万更でもなさそうだが。

話は変わるが、今日は刀海との模擬戦。武を極めた刀海にどこまで自分が通用するものか。愛紗は適度な緊張感を持ち、偃月刀（木）を構える。

対する刀海も右手で数回偃月刀（気）を弄んだ後、ゆったりと構えた。

～愛紗～

（……全く隙がない）

刀海と対峙し、改めては思った。

首や脇腹、足元など様々な箇所を観察するが、斬り込める所が全

私の構える偃月刀の刃先に一匹の蝶が留まったのだ。邪魔だと思
い、つい偃月刀を軽く揺すってしまった。
その行動が間違이었다ことに今気付く。

師匠が偃月刀を手で回し、勢いを付けながら迫って来た。

「くうッ！」

何とか腕を引き上げ、横尻ぎに振るわれた師匠の偃月刀を受け止
める。

ギインッ！

何とか防いだものの、力差でかなり押されてしまった。

「……………油断は大敵だぞ？」

立て続けに師匠の連激が放たれる。

上段、横尻ぎ、石突き、切り上げ、騙し切り、突き、斜め切り…

……………。

全てを防ぎ、躲し、捌く。

最後に上段からの斬撃を受け止める。

ガギインッ！

かなり強い力の一撃を偃月刀を横に構え、何とか防ぎ切った。

「……つつう……」

あまりの重い一撃に手が痺れて偃月刀を取り落としてしまう。

「……ほお、かなり良くなってるな。この調子で頑張れ」

「え、本当ですか!」

「ああ。当たり前だ。俺の攻撃全部防いじゃんか。誇っていいぞ」

「あ、ありがとうございます!!」

ペコツと頭を下げる。

師匠もニコニコしながら頭を撫でてくれた。

……… 大丈夫、そう簡単に理性は吹っ飛ばない。

「よし。今日はこの辺で。ちょっと出て来るわ」

「はいッ。お気を付けて!」

「おうよ〜」

ヒラヒラと手を振りながら歩き去る師匠。あの手の感触が名残惜しく感じた。

不意に、手に持つ偃月刀を見る。

(………もっと、強くなる)

それが、私の永遠の目標。いつか、師匠だって……。

私は、辺りが見えなくなるくらい深い闇が覆い尽くすまで、修行をした。

翌朝、
愛紗は筋肉痛で起きることさえ出来なかったとか何とか……。

第9話 関羽、蒼神と別れるのこと（前書き）

文字通り。

そして短い。

人はそれを駄作という………のかな？

第9話 関羽、蒼神と別れるのこと

この村に来てあつという間に三ヶ月が過ぎた……………何、飛んだ？
気にすんな。気にしたら負けだ。

何とも有意義な生活だったし、山賊狩りやら色々頑張った。

そうこうしている内に、別れがやって来た。

確かに別れっちゃあ寂しいが、別に一生会えなくなるワケでもない。

というか、俺も蜀に入ろうと思ってるから、何れまた一緒になるだろう。

話は大幅に変わるが、愛紗も大分強くなった。さながら、普通より上手い。エリートぐらいかな？

まあ、想像におまかせする。

急に、戻るなんて言ったら愛紗が物凄く驚いた後、泣きそうな顔してた。それでもなんとか慰めたがな。

村の人達からは感謝されっぱなしで、色々貰った。酒とか酒とか酒とか酒とか酒とか酒とか……………酒ばっかだな。俺そんなに飲まないよ……………？

まあ、流石に断るワケにもいかないから貰った。飲み切れるかな？

それで、今日が最後の日で、丁度村を出るところ。

振り返ると、大勢の村人が手を振ったり、感謝の言葉を口にした

りしていた。

「また来いよー！」とか「達者でなー！」とか「大好きー！」とか
……………最後のは華麗にスルーした。後々面倒だし。

「じゃあな、愛紗。また会おう」

最後に、近くに來た愛紗に声をかけ、頭を撫でた。

「……………あ、あの…師匠……………か、屈んで、もらえますか？」

屈む？　しゃがめってことか？

「ん、なんだ？」

よく顔が見えるように真っ正面に屈み込んだ。顔を観察すると、
愛紗の頬に赤みが差していた。

「あの、えつと……………耳を……………」

ゴニョゴニョと、呟くような声で言う愛紗。内緒の話らしい。
早速顔を傾けて、言葉を待つ。

「……………その…ッ……………」

ふと、頬に柔らかい感触が。

短く触れられた後、何かと思いきや振り向いたが、当の愛紗は逃
げるように背を向けて走って行った。

「なんだっただんだ？」

耳には何やら讚えるような歓声が聞こえた。
『ヒュ〜』とか『おお〜!』とか。

???

ま、いいや。

「そんじゃ、またな！」

最後に大きく叫び、村の門を潜る。

三ヶ月。

思ったより長く滞在してしまった。

まあ、楽しかったから問題無し。

朱里や雛里とも久し振りだなあ。今頃どうしているだろうか。

帰ってからは、実に楽しみだ。

不意に、遙か頭上を一羽の鳥が通り過ぎた。

見上げると、夕日に照らされた紅の空が一面に広がっている。

「明日は、晴れか……。」

雲一つ無い太陽の沈む西の空を見つめ、小さく呟く。

一匹の蜻蛉とんぼが、どこまでも飛んで行く……。

第9話 関羽、蒼神と別れるのこと（後書き）

アトガキ！

刀海「意味もなく始まってしまいました。『アトガキ！』のコーナーです。えー、これはですね。作者が『皆やつてるし俺もやってみよう』という気まぐれで始まった物であります。中身は何一つ決まっていないうんなんとも行き当たりばつたりのコーナーですが、取り敢えず最後までお付き合い宜しくお願いします。パーソナリティーは蒼 夜宏こと空崎刀海が行いますー。あ、因みにこちらはしりあすとは異なり、こめでい重視となっておりますので変な空気になるかと思えます。それでも宜しい方はページはこのまま。読み飛ばしても結構でございます（棒読み）」

愛紗「師匠、いくらなんでも渡された長い原稿をつらつら棒読みにするのは良くないかと……」

刀海「ツツコミどうも。さてさて。今日のゲストは関羽こと愛紗です。ゲストは一話一話でかわっていくと思われしますので、ご期待下さい（棒読み）」

愛紗「師匠、いい加減棒読みは止めた方がいいですよ。作者も親指立ててないで何か言って下さい！……え、何……」
「こめでいだから大丈夫」？…ああ、そうですね……」

刀海「さてさて。じゃあ進めようか」

愛紗「師匠、何故か凄く抜けてませんか……？」

刀海「ん。俺の口調は現在進行形で作者の状態が反映されてるからね。今作者はスツゴく眠くて参ってるってこと。このままいけばコロコロ調変わっちまうねえ」

愛紗「大変なんですね……」

刀海「そうだなあ。リアル多忙で寝不足なもんだから駄作者にでもなってるんだろっな」

愛紗（えらく自分を罵っておられる作者だ……）

刀海「んで、今回の企画はっ、と………次回予告だそうだ」

愛紗「予告、ですか……。何か前置きが必要ですよね？」

刀海「ふむ、それもそうだ。しかし………現在進行形でネタがないぞ？」

愛紗「いつそのこと、無いなら無いということネタにすれば良いと思うのですが」

刀海「まあ確かにこうして会話が成立してる訳だが……超g d g dになっってきた」

愛紗「これでは持ちませんね。もう素直に終わらせましょう」

刀海「それもそうだな。んじゃ、いってみよー。次回、『第10話 蒼神、久しき者に会うのこと』」

愛紗「お楽しみに」

刀海「ではでは、また本編及びアートガキ！ でお会いしましょう」

刀海「……愛紗。今回かなり固いキャラになってたぞ？」

愛紗「え？ そうでしたか？」

刀海「……」

愛紗「……」

第10話 蒼神、久しき者に会うのこと

深い霧に包まれる地。

それも少しづつ晴れ始めてきた。

木々は紅葉に染まり、いかにも『秋』という季節を表していた。

「久しぶり……つっても三ヶ月か。ん？ 微妙な期間……」

自分の言ったことに突っ込むのもどうかと思うが……。

「まあいい。朱里達に言い訳考えねーと……」

苦笑いを浮かべ、水鏡塾へと続く階段に足をかけた。

+++++

〜朱里〜

「ハア……」

浮かない顔で朱里ちゃんが溜息をつく。

「……刀海さん……まだ帰りませんねえ……」

「うん……」

朱里ちゃんと同じで私もあまりいい気分ではない。
兄様が全然帰ってこないのだ。

ふと、兄様の顔が思い浮かぶ。

優しい瞳に穏やかな微笑み。

その……凄く格好良くて……、あわわ……。

「……雛里ちゃん？ 顔が赤いけど？」

「ふえッ！？ いや、そんな……」

「刀海さん、格好良いよね……」

朱里ちゃんもどんだん顔が赤くなっていつてる。

「……早く帰ってこないかなあ……」

ポツリと朱里ちゃんが呟く。

私だって同じ気持ち。

あ、そうだ。

「朱里ちゃん！ 早く仕事仕事！」

「はわわ！ そうだった！」

今しているのは水汲み。

季節も寒い時期になって水も冷たい。

「あう… ちべたい……」

「おうおう、じゃ俺がしてやるよ」

「あ、ありがとう……」

お礼をしようと振り返る。

その視線の先には……。

「いよっ！ 久しぶり！」

元気な兄様がいた。

+++++

く刀海く

言い訳が思いつかん……。仕方ないからアドリブで対処してやる。こつ見えてもアドリブには自信がある。

サプライズでもしようかと音をたてぬよう中に入る。

二人はどこだー？ と探すと井戸で水汲み中。

後ろから気配を消して近づく。

「あう……ちべたい……」

「おうおう、じゃ俺がしてやるよ」

軽く声をかけた。

「あ、ありがとう……」

そして振り向き固まる雛里。

十秒弱の沈黙が続いた。

「……兄様あツ！！」

その後、涙目の雛里がおもいつ切り飛び込んで来た。

刀海の右手は雛里が。左手は朱里が常にキープする。因みに刀海が座る時は膝が雛里の定位置となる。

それぐらい刀海は二人に愛されていた。(この場合の『愛されていた』は恋愛や家族愛など沢山の意味を含んでいます)

と言う訳で、(一体何が『と言う訳で』なのかは突っ込まないで下さい)只今から夕食タイム。

今だに刀海にベツタリな朱里と雛里である。

真面目に廁や風呂の時に離れてくれるか心配にもなり始めている刀海。

それでもそんな時はそんな時だ、と楽観的思考の刀海は父親になった気分を存分に堪能していた。

「ふむ、麻婆うまし」

本場の麻婆を一口含む。

辛さもあって旨味もある。

ふと視線を落とすと、羨ましそうにこちらを見る雛里がいた。

「なんだ。食いたいのか？」

問い掛けると顔を効果音が付きそうなくらいパアアツ、と輝かせた。

まあそれならばと刀海も麻婆を少量掬い、雛里の口へと運ぶ。

少し躊躇った後、小さく口を開けて麻婆を食べた。

可愛い姿に頬を綻ばせる刀海と水鏡。そして何故か朱里が羨ましそくに。また不機嫌そうに見ていた。

もきゅもきゅ口を動かす雛里を見て頭を撫でる。

「……………雛里ちゃんばかり……………ズルいです……………」

「？ 朱里何か言ったか？」

「ふえッ！？ い、いえ、何でもないでしゅッ！……………あう……………」

定番となった噛み噛みの口調で顔を真っ赤にする朱里。

それを誤魔化すように口に食べ物詰め込んでいく。

「おいおい、喉に詰まるぞ？」

楽しく、愉快的な夕飯は皆で笑い合い、和気藹々と進められた。

く刀海く

月を見ながら酒に酔う。

実に解放感があって清々しい。

静寂な暗闇は淡い月明かりに照らされ神秘的な雰囲気を作りだす。
夜空に散りばめられた星屑が爛々と輝き、自分を祝福しているよ
うにも見えた。

世を跨いで約四ヶ月。

ここ暫くの間は下手に動かない方が良い。

後々の原作に疎誤が出来てしまう可能性が零^{ゼロ}ではないからだ。

しかし、原作にこうして蒼 夜宏が介入してしまった以上、何か
が起こり得る訳だ。

それは既に覚悟はある。

フォローは神がどうかしてくれるに違いない。取り敢えず信用
してみる。

わかる通り問題は十数年後。

蒼 夜宏の介入により、北郷一刀がどう動くか。

実際、『蒼 夜宏』なる人物はいない。

派手に動けば俺が歴史に残り、様々な影響が出る。
その辺りは貂蟬に訊かんとだ。

本音、あまり会いたくない。

キモいから。

まあ、ゆっくり考えて行こう。

ここが、パラレルワールド平行世界である可能性もあるからな。

さて。いつぐらいにここを出ようか。

洛陽にでも入っておこうかな？

反董卓連合辺りが心配だ。

多少歴史が変わっているやかもしれん。

やっぱ、半年後には出ようかな？

霸王とかの下見も兼ねて、ゆっくりとブラブラ歩き回るのも悪くない。

となれば、早めに準備でもして水鏡殿にも言っておかないとだな。

朱里と雛里は……………どうしようか……………。

真つ正面から別れるなんて言う到着して来るとか離さないとかしてきそうだ。

かといって、急にいなくなれば悲しむだろうなあ……………。

俺的には後者を選びたい。が、答えは検討中。

制限期間は約半年。

……………気長に考えよう。

今日はゆっくり酒にでも酔わせていただく。

まだ時間はあるんだから。

第10話 蒼神、久しき者に会うのこと（後書き）

アトガキ！

刀海「ちわ〜っす。主人公の刀海で〜っす。今回も、張り切って『アトガキ！』行ってみましょ〜！」

朱里「『今回も』って、前回かなり投げ遣りだったような……」

刀海「さあ、なんのことだか。取り敢えず今日は諸葛孔明こと朱里をゲストに向かえていくぞ〜、つっても作者が何も企画してねえからちよつと知らせた後、次回予告いくぞ」

朱里「はい。え〜、最近感想やご意見がないことにより、この『アトガキ！』のコーナーが二回目ですが、グダグダになりかけています。出来れば沢山のご意見をいただければと願っております。是非ともお願いします」

刀海「恨むなら作者の方を。企画は全部任せるとか言って吐かしておきながら全然出来ないやつなんで。取り敢えず、ご意見等よろしくです」

朱里「それでは、次回」

刀海「『第11話 韓欄、会いに行くのこと』超短い故に俺の出演ナシ!？」

朱里「また『アトガキ！』にてお会いしましょう」

第11話 韓欄、会いに行くの1つ

すっかり冷え込んだ山道を少女は歩いていった。

茶色の混じった艶のある黒髪を肩辺りで乱雑に切り揃え、深い蒼の瞳を輝かせる少女。

名を韓欄^{かんらん}。字は桜干^{おうせん}。と言う。

寒くなりましたね、と一人呟く。

彼女は一人、旅をしていた。目的は、ある人物に会う為だ。

ある人物、というのは、彼女の村に訪ねてきた者だ。

この地方では見かけない服装に、漆黒の羽織を纏う者。そのどこか威厳を感じられる佇まいは、今までにない程彼女の胸を躍らせた。

そのある人物が来たのは、丁度、村が賊に襲われた時だ。

何百人という賊達を蹴散らす姿。決して傷を負わない、無敵。彼は、『神の御使い』といった。

その人物はそのまま消えてしまい、彼女らの前に二度と現れなかった。

韓欄は、彼に会わなければならぬ。

村を救ってもらったことのお礼。そして、……ちょっとした私情も含めてだ。

不意に、視界に白い物が入って来た。

雪だ。

「……これは…寒くなりますね。急がないと……」

韓欄は鉛色の空を見上げ、足早に次の村へ進む。

村はもう、目の前だ。

第12話 韓欄、立ち寄ること

季節はもうすぐ春といったところ。雪も殆どが溶け、残っているのは日陰となる場所だけ。まだ涼しい大地に柔らかな日の光が降り注ぐ。

とある村。

村と言ってもかなり立派なもので、頑丈な防壁に堀。行き交う商人達。活気ある村人達。

小さな小さな町を眺めているような気分になれる。

「うわぁ……」

感嘆の声を漏らす彼女は韓欄。果ての村より水鏡塾を目指して旅をする少女だ。

「……ハッ！ そうだ。早く宿を見つけなきゃ！」

活気ある風景に見惚れていた韓欄。我に返り、漸く宿探しを始めるのであった。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

「いきなり迷子……ツいてないのですう……」

宿探しに精を出した韓欄ではあったが、半刻も経たぬ内に迷子となり、人通りの少ない路地裏をトボトボ肩を落として歩いていた。

「ケケケ、お嬢ちゃん可愛いねえ……どう？ おじちゃん達と遊ばねえかい？ ま、俺等が一方的に構ってやるけどよお」

道行く先に三人の男共。振り返ると、そこにもすでに五人が道を塞ぐように立っていた。

ジリジリと歩み寄って来る男共。

韓欄は壁に背中が当たり、へなへなと座り込んだ。

「キヒヒヒヒ、そんじゃ早速」

「下衆な男共よ！ 関 雲長の名の元に成敗する！」

男の一人が韓欄に手を出そうとした時だ。一人の少女の声が響いた。綺麗な黒髪を横で纏め、自身の身長を越す偃月刀を持つ美少女だ。

突然の出来事に動きが僅かに止まった男共を少女は偃月刀で次々と倒していく。速さ、鋭さ、正確さ。全てが洗練されたものであり、韓欄はつい見惚れてしまっていた。最後の一人を倒した少女は韓欄の元へと来た。

「我が名は関羽。字は雲長です。貴方は？」

「は、はひッ！ 名は韓欄、字は桜千ですッ！」

緊張のあまり、上手く回らない口で韓欄は喋る。

「韓欄殿だな。怪我は無いか？」

「だ、大丈夫ですッ、はい！」

「それならよかった」

ホッと安心したように関羽は息を吐いた。

十十十十十十十十十十十

「韓欄殿はどうしてこの村に？」

「私は旅の途中でして、ある人を探しているんです」

「ある人？」

「はい」

関羽の問いかけに、韓欄は嬉しそうに頷いた。

「私の村を救ってくれたんです。凄く強くて、私憧れてて……でもすぐに出去てしまわれたんです。それで、せめてお礼だけでもと思って今は追い掛けているんです」

とても嬉しそうに語る韓欄を見て、関羽も相槌をうつた。かくい
う関羽もとある人物に救われたのだ。

「ところで、その探している方とは？」

関羽は興味本位で訊いてみる。

「はい。黒髪の男の人で、武術が凄く強くて、素手で戦うんですよ！
それで、いつも黒い羽織を着てて、『神の御使い』って呼ばれ
ているみたいなんですよ！」

「すまない、韓欄殿。もう一回言ってもらいたい」

「えーっと、黒髪で」

「次」

「黒い羽織を着てて」

「次」

「えっと……『神の御使い』」

「それだあッ！……！」

「ひゃいッ!？」

突然大声を上げ指を指されて韓欄はひっくり返った。

+++++

「ハックシヨイツ！！！！！」

黒髪のを装を着込む青年が思いっきりくしゃみをした。

「…………噂か……？ まあどうでもいいが……………ハックシヨイツ！！！！！！」

大変なんですね。

+++++

時は刻一刻とあつという間に過ぎ去り、日も数刻前に完全に落ち切っていた。

韓欄は、関羽の家に泊めてもらうことに。韓欄が探す人物と関羽がまた会いたいと願う人物が一致。意気投合して何刻も何刻も語り合っていたとか。そうして今に至るらしい。

「はああ…………気持ちいいです…………」

現在、関羽と韓欄は入浴中。二人で丁度良い広さの浴場だ。

韓欄はじーっと関羽の双丘を見る。自分は全く無いとまではいかないものの、関羽なんかはかなり大きい。ボン、キユ、ボンはもう一、二年後だろう。

「……………」

「か、韓欄殿？ 何故そんなに憎らしいモノを見るような目を……？」

結局、関羽がちょっと立派な双丘を晒しだしている間はずっと韓欄はそれを睨んでいた。

こちらは大変なようです。

第13話 蒼神、夜を歩くのこと

とある夜中。蒼神こと刀海は水鏡塾の門の前にいた。

「……行かれるのですね」

彼の後ろには水鏡が悲しそうな表情で立っていた。

「ああ。朱里や雛里には悪いが、消えさせてもらう」

そう言う刀海だが、彼の顔にも悲しさが漂っていた。

出会って約半年。色々な時を過ごしてきた。別れ、と言うものはやはり寂しくなるものだ。刀海が何かに気づいたように顔を上げるが、やれやれといった感じで視線を足元に落とす。

「そんじゃ、水鏡殿。俺は出るとする。……ああ、そうだ」

門に手を掛けかけたが、引っ込め自ら自分の羽織を脱いだ。

「これを二人に預けてくれ。今度会うときに必ず俺に渡すようにと伝えてくれ」

そう言うって刀海のシンボルマークでもある漆黒の羽織を手渡した。

水鏡はにっこりと微笑み、わかりましたと告げた。

「じゃ、また会う日まで……」

刀海は今度こそ門を開け、まだまだ深まる夜の闇に消えた。

「……ハハツ、寂しい…ねえ……」
満天の星空を仰ぎ見ながら刀海は呟く。

別れ、というものはやはり哀しみが溢れるのだろう。家族のような存在と、もしかしたら生涯一度も会わぬまま終わりを遂げるかもしれない。

でも、と思う。

必ずまた会えると。いや、会えるのではない。会うのだ。絶対に。「それまで、『神の御使い』はお休みだな……」さて、と言い「暫らくはなんて名乗ろうか？」

これからは、蒼神の名を隠し生きてゆく。あつという間に国全土に広まった噂にびったりと当て嵌まる蒼神は堂々と人の前で名乗れる程良いものではない。これから暫く隠居的な生活を送る刀海にとつては致命的である。

「……こりゃ人相や容姿も変えていかなきゃか」
どうしよう？ と刀海は首を傾げる。流石に今の二つはキツイ。特に容姿だ。

今の時代には髪染などあるのだろうか？

「はいはい！ ここで漸く私の出番だね！」

ひょこつといつぞやの神様が刀海の背から顔を出した。

「おお、いつぞやの……えーっと………そういや名前訊いてねえぞ？」

「あれ、そうだったけ？」

小さく首を傾げる。

「そうだ。今更だが教える」

「むむむ、命令口調はいただけないかも」

「…そうか………なら、ランクを一つ落としてやろう…次は確か……虫？」

「ごめんなさいリーシャですランクダウンは勘弁願いますう！」

「はいよくできましたー（棒読み）」

「……………」

「まま、そう落ち込むなや。リーシャ？」

ツン、と額を小突く。

「あう」

意外にも可愛らしい反応で額を抑える。刀海はその姿に幼い猫を想像した。

「……よし、今度は猫耳をプレゼントしてやる」

「一体何を前提に!？」

「いやなんとなく」

「理不尽だ!」

何故か騒ぎだすリーシャ。刀海自身が理由をわかっていない。取り敢えず、駄々っ子に見えたリーシャを撫で、高い高いをしながらクルクル回ってみる。

「ちよっ!？ 子供扱いしすぎ!」

「えー。だって駄々っ子みたいだからこうすれば落ち着くかと思つて……………」

「やっぱり私が理不尽なんだね!」

ガミガミと夜道を鬱陶しく歩く二人であった。

「んで、出番つてのは？」

「あ、そうだった」

刀海から漸く解放されたリーシャは気付いたように手を打つ。

「さっきの悩みみたいになやつ。あれ、何とか出来るかも」

「あ、そ。じゃやつて」

「軽ッ!？」

素っ気ない返答にズルツと滑る。

「いやあ、それが出来れば無問題モーマンタイだからな」

頬を緩ませて刀海は笑った。

「それで、実際どうすんの？」

「取り敢えず、これ着けて」

と、リーシャが渡してきたのは正解すると強くなる青年が顔に着けるともつと強くなる仮面だった。

「何コレ。ちょー懂れてたやつなんですよ」

目をキラッキラに輝かせて刀海は仮面をまじまじと眺めた。

「因みに強くはならないよ」

「今だけで充分チートだからね、と補足する。」

「…な、なんだと……!？」

地面に手を着きうなだれる刀海。黒い縦線が見えるくらい負の才
ーラが漂っていた。

「え、ちよつ……、そんなにショック……?」

「狼狽えながらリーシャは問う。」

「…ああ……夢を砕かれるくらいな……」

刀海は懂れていた。ホロワカ虚化に。

「……………うん。なんかゴメン。だからさめざめと泣かないで。罪悪感が凄いから」

結局、彼が立ち直るまで数時間を要したとか。

因みに、仮面はキチンともらいました。

第13話 蒼神、夜を歩くのこと（後書き）

アトガキ！

刀海「オツス！ オラ刀海！ よくわからんけどワクワクすっぞ！」

雛里「あわわ……えーっと、ひっ、雛里でしゅっ！ ……あう」

刀海「ハイハイ。てな訳で『アトガキ！』のコーナー始めるぜよ！

えー、今回の企画はっ、と……何々？」

カンペ『今回は雛里をメインでやってくださいな by 作者』

刀海「だそうだ雛里。頑張れ」

雛里「は、はははははひ！ えーっと、えーっとー」

カンペ『次回予告して（グッ！）』

刀海「わざわざ親指立てんでも……」

雛里「あうう……、じ、次回、『第14話 時、数年翔ぶのこと』
でちゅっ！」

刀海「お楽しみに」

洛陽は一言で言えばキチンと活気ある街であった。

「最初に警戒すべきは……黄巾党、か……」

城へと向かう途中、刀海は呟いた。ここ最近、洛陽に来るまでの間にも黄巾党の賊に多々出くわしていた。こうなると、黄巾党の乱も間近である。……と言っても刀海は関わる気はさらさらない。その辺りは魏の曹操がどうとでもしてくれる。まずは反董卓連合だ。三國志に刀海が介入したことにより、歴史は大幅に変わるだろう。恐らく、このままいけば愛紗　　関羽が華雄を討つ結末に至る。流石にこの世界の住人を殺される訳にはいかなかった。

ここに来る途中、刀海は貂蝉に会っていた。ここからはその時の回想シーンである。

+++++

夜も深まる森の中。

焚き火を二人の人影が囲んでいた。

「貂蝉、で間違いないな？」

「その通りよん」

嗚呼、実際に見ると気持ち悪いという愚痴は閉まっておく。

「さて、こうしてお前に話があるのは他でもない。この外史についてだ」

貂蟬も空気を察したのか、真剣な顔で頷く。

「俺は今、こうして神の実験でこの外史に介入してしまった訳ではあるが……その辺りは大丈夫なんだな？」

「勿論よん。この外史は歴史を変える為に創られたモノ。貴方がどれだけ歴史に介入しようとそれは構わないわ。寧ろ、大歓迎ね。」

「……リーシャも色々と考えてんだなあ。」

「貴方が来てくれて助かったわあ。この外史も消えなくて済むしねん。」

「外史が、消える？」

不吉な言葉に刀海は目を細める。

「そ、力を失った外史は消える運命。それが当たり前なのよん。」

焚き火に枝を加えながら貂蟬は言った。

「外史、というものは多数存在するの。その一つ一つにキチンとした存在意義があつてねん。『歴史に忠実な外史』であつたり、私のご主人様の『反対の外史』、『遠い外史』であつたり。それは様々なのよん。ご主人様は魏にいるわん。『反対の外史』というのは、ご主人様が曹操ちゃんに敵対する外史。『遠い外史』はご主人様が呉や蜀で紡ぐ外史なのよん。理解できるかしら？」

「……取り敢えずは、な。」

「そう。貴方はその内の一つの外史。『歴史を否定する外史』に来たのん。」

歴史を否定。つまりは、歴史に忠実になつてはいけないのだ。

「……つてことは、大幅に歴史を変える必要がある……つつうことだな？」

「そうよん。貴方の都合の良いように動いてもらつて構わないわん。出来れば、この先起き得ないことをやつてもらえれば有難いわねん。」

「善処する。あまり期待はしないでくれよ？」

「じゃ、大いに期待しちゃうわん。」

「……………」

とまあこんな感じで別れ、洛陽へと来ていた。

この外史はおそらく魏が三国を統一するだろう。刀海はそれを阻止し、三国を平等に収める　　つまりは、天下三分ということだ。

まずは手始めに反董卓軍との戦で華雄を救い、負けようがどうだろうと、董卓軍の将の全員で生き延びる。なんなら張遼を魏にやらずに蜀に収めてしまう、というのも取り敢えずは頭に入れてある。と言ってもそこまで手が回るかと問われれば流石にキツイ。まずはやはり、華雄救出が先なんだろうと刀海は考える。

「……優先事項からだな」

ふう、と溜息をつく。それより、

(……周りの視線が痛エ……)

さつきからこちらの顔を見て目を逸らす者が多いのだ。多分、ホロウカ解青年の虚化は怖いに違いないと、刀海は勝手に解釈する。

少し痛い視線を浴びつつ、刀海は城への道を急いだ。

第14話 時、数年翔ぶのこと（後書き）

アトガキ！

刀海「あい、毎度同じみの刀海だ」

蒼刀「ンで、仮面つけると出てくる俺は蒼刀だ。この先よおく出てくっからしっかり頭ン中叩き込んでおけ」

刀海「勿論、俺も出るからな。口調が微妙に違っから気を付けろよ」

蒼刀「ンで、今回も企画は次回予告だけなのか？」

刀海「作者の冷や汗の量からして間違い無いだろうな」

蒼刀「そーかよ。じゃ、ちゃっちやと終わらせンぞ」

刀海「はいはい。それでは次回、『第15話 蒼神、蒼刀として仕官すること』」

蒼刀「俺が多めに喋ってるからな。取り敢えず見ておけよ」

第15話 蒼神、蒼刀として仕官すること

門番らしき人物に要件を伝え、刀海は城の内部へと入った。途中、仮面を取れと言われたが、『グチャグチャにされたグロい顔を見たいか?』と嘘を言っただけで脅したところ、恐怖に震えながら素直に引き下がった。これって結構良い効果あるかも、と薄々考えはじめた刀海であった。

「……で、いかにも怪しいアンタが仕官したいって? 確か…蒼刀ね」

来たよツンデレと心の中で呟きながら刀海は受け答えする。

「その気が無けりヤアこんなところにはいねエよ」

緑髪のメガネ軍師、賈馭に皮肉を込めて返答する。

「そ。それより、素顔を見せてもらえないかしら?」

「……そんなに見たいのか?」

「仕官するなら、主たる月に見せるべきよ」

「……これを外すには、条件がある」

条件? と賈馭は首を捻る。それに刀海仮面の下で笑って答えた。

「ああ。条件は、将を全員集め、その将以外は退出してもらっただ」

その条件に董卓と賈馭が目を見開いた。

「……どういうこと?」

「どうもごうもそーしてもらわにゃ、顔は見せらんねエっつことだ」

「……………」

黙り込む二人。刀海が何かを企んでいると踏んでいるのだから。

まあ、殺すような真似はしないが少しは企んでいるが。

「……いいよ。詠ちゃん、この人の言う通りにしよう」

「なッ!? 月、こんな怪しい奴の言うことなんてないのよ!?!」

董卓は折れたが、賈馱はまだ疑っている。確かに、初対面の相手の言うことはいはいと聞き入れる訳にはいかない筈だ。

「蒼刀さんは殺すような真似はしないよ。目でよくわかる」
董卓の一言に賈馱が刀海の目を見る。

「……まあ、月がそう言うなら……」

十十十十十十十十十十十

「さて、全員揃ったようだな」

誰も一言も発していないのに、刀海は先に話し始める。そして、付けている仮面に手を添えた。

「いままで騙しててすまなかった。俺が説明するまで、誰も口を開かないでくれ」

サツ、と手を振る。すると、仮面は煙のように消え蒼い髪は漆黒に染まった。

「俺の本当の名を言う。くれぐれも外にはばらさないように。姓は蒼、名は神、字は夜宏。『神の御使い』とは、俺だ」

うん、自分カッコいいとか思ってる刀海。一方、周りの将達はポカンと口を開けていた。

「……何か喋ってくれ。凄いい気まずいんだが……」
墮ちる沈黙。数十秒後、漸く董卓が口を開いた。

「……ほ、本当に……あの、蒼神さん……なんですか……？」

半信半疑で訊いてくる董卓。

「本人がそう言ってるのだから、当り前だろう?」

周りを見渡ししながら刀海は言った。

「……そうか。ならば、神の御使い殿は武術が優れていると風の噂で聞いた! その武、今ここで証明してもらおう!」

今回の救護ターゲットである華雄が一步前に入る。刀海は薄ら笑いを浮かべた。

「いいだろう。認めてもらえるならば、いくらでもやってやる。取り敢えず、仮面を付けてる間の俺は蒼刀と呼んでくれ。じゃ、華雄。案内してくれ」

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

修練場。ここは訓練場である。今は、刀海と華雄の一騎打ちのため貸し切りとなっている。因みに、刀海は仮面を装備中だ。

「さ、始めようかア」

刀海は拳を。華雄は戦斧を構える。

「はあああああああッ!」

最初に動いたのは華雄。武器を振りかぶり、斜めに斬る。刀海は軽々後退して躲す。その後も華雄がどんどんと攻め立てる。

「……あの人、凄く強い」

外から見ていた呂布が口を開いた。

「やっぱ、そう見えるわなあ」

張遼も呂布と同意見。身のこなしから動体視力までがずば抜けて高い。そして、明らかに余裕という感じが見て取れる。

「どオした？ その程度かよオ」

「まだまだ！」

華雄が一步踏み出す。それと同時に刀海が入り身により、戦斧の射程を越えて懐に入り込んだ。

「！？」

とつさに退こうとするものの、体重が完全に前に掛かり動けない華雄。刀海は、最小限の力で華雄の顎に掌打を入れる。軽くふらついたところで斧を奪いとって、それをぴったりと華雄の首筋に添えた。

「勝負、ありだなア」

斧を地面に突き刺し、董卓達のいる元へと移動する。

「あら、やっぱ異名は伊達じゃないわね」

「うわあ、お見事です！」

「フンッ、でも恋殿にはまだまだ及ばないのです！」

「やっぱ強いなあ！ 次、ウチとやろうや！」

「……………」

五者五様の反応である。華雄は慰めなくていいのかよオイと刀海は内心ツツコミを入れた。

「まあ使えるようね。取り敢えず、武官にしてあげるわ」

「どーも」

「ななっ！ 話はそこまでにして、早くやろうや！」

話し込む二人を見て、張遼が刀海の袖をグイグイと引っ張る。

「あー…、こついう場合はどうすりゃいいんだ？」

「そうね……。取り敢えず相手してあげて。その後でボクから色々話があるから」

「ン、わかった」

了承を得た刀海は張遼に向き直る。

「そんじゃ、始めようかい」

ふと、張遼の顔を見る。その視線は刀海の仮面へと向けられていた。

「なあなあ、その仮面取らへんの？」

「ああ、コレか？ 周りに将以外の人がいなければいいんだけど……
実際はどうなんだ？」

「取り敢えず、ウチら以外はおらへんで」

「そうかいなら、遠慮なく外そうかねエ」

さつきと同様、仮面を手で払う。

「……………」

途端に固まる張遼。

「ん？ どした？」

「あ、いや、なんでも……………」

（なんや、ちよーカツコええやん！）

頬を赤に染め上げた張遼。刀海は急な展開に軽く困惑していた。

（アレ？ 張遼が動かない？ フリーズ？）

中身の困惑度は外見よりもすさまじいものだった。

第15話 蒼神、蒼刀として仕官すること（後書き）

アトガキ！

刀海「毎度同じみの『アトガキ！』のコーナー。今回のパーソナリティを務めるのは俺こと刀海と、」

霞「ウチと一緒に進めて行くでえ！」

刀海「あい、という訳でまずはトーキングタイム。あの後真名を全武将と交換……ミスった。華雄に訊くの忘れてた」

霞「大丈夫やる。その内作者はんが機会作ってくれるやろうし。な？ ……あれ？ めっちゃ考えとる……」

刀海「まあそんな駄作者は放っておいて、次回予告行くぞ」

霞「了解や！ え、次回『第16話 日常、のんびり過ぎてゆくこと』や！」

刀海「作者が頑張ってコメディー仕様にするらしいぞ。あまり期待はすんなだとさ。そんじゃ、失礼する」

第16話 日常、のんびり過ぎてゆくこと ～一席目～

「……うだー……」

仮面を外した刀海は机に突っ伏していた。慣れない机仕事デスクワークに精魂
尽き果てたからだ。

「……ちよつと待て。何で武官の俺がこんなことをやらなきゃいか
んのだ？」

それは、文官がいないからだと言っていた筈だが、早速刀海
は忘れていた。本当に、歴史以外には能の無い人である。因みに、
董卓軍の将とは殆ど真名を交換していた。華雄は決闘の後落ち込み
っぱなしで声を掛けなかつたので未交換の状態である。実際には真
名あつたのかな？ と軽く思考を巡らせた刀海ではあつたが、面倒
くさいの一言に尽きあつさり思考を中止。寝た。視界の端にはそれ
なりの書類はあつたが見なかつたことにした。やはりこの人は、自
由気ままな人だつた。

「ちよつとアンタ！ 何寝ようとしてんのよ！？」

意識を手放そうとしたその瞬間だ。詠がいきなり部屋の扉を勢い
良く開け、その音により刀海の脳が覚醒する。

「うがあああッ！ 俺の至福の一時があああッ！」

「そんなんでも良いでしょ！？」

「良くなあああああああいッ！！！」

「ああもう！ ほら、早く仕事して！ 終わつたらボクの所に持つ
てくること！」

「…さー、いえっさー」

やる気ゼロな返事を聞き、詠退室。う、うだー、と更に刀海のテ
ンションが落ち込んだ瞬間でもある。

『神の御使い』をこんな扱いにしてて良いのかよと刀海は内心ツツ
コミを入れておく。

「だ、大丈夫ですか？」

「おお、我らが主月様ではございませんか」

刀海がかなり壊れ始めている。月からもそれは見て取れた。

「あの、睡眠をとられても良いですよ？ 刀海さんは元々武官なんですから」

そう言つて微笑む月。そんな彼女が刀海には女神に見えた。

「んじゃ有り難く……zzz」

と、すぐに机に沈む。よつぼど眠かつたに違い無いと月は笑つた。

+++++

「……………おう……………」

日も大分傾き始めた頃。刀海は目を覚ました。原因は扉を開けた時の音を聞いてだ。

「……………む？ 霞か」

入って来たのは霞。片手には酒を持っていた。

「トーやん、一献付き合つてくれへん？」

猫を連想させる笑顔で尋ねてくる。刀海は寝起きの頭を一回沈めて頷く。決してこういうのに弱いという訳ではないが、依頼された場合は到底引き受けてしまふのが刀海だ。

「……………ああ、でも仕事か……………」

と言つて手元の書類を見る。相も変わらずそこには寝る前と同じ量の物があつた。多少皺があるが、そんなものは目に入っていない。

「……後が色々ヤバい気がするんだが……」

軽く冷や汗を流しながら霞を見る。

「まあまあ、後で頑張ればいいんだよ。ささ、行こうで！」

昼から酒盛りかよ、と口の中で呟いた後、霞に手を引かれて中庭へと移動した。後々の詠の説教を覚悟したのは言うまでもないだろう。

十十十十十十十十十十十

「ぶはあく！ やっぱ美味しいなあ……」

一息に酒を煽った霞が感想を述べる。

刀海と霞は洛陽で最も高い場所に居座り酒盛りをしていた。

前世では酒も普通だった刀海も、ここに来てからはかなり強くなっていた。恐らく今なら普通の人の五十倍は飲める……らしい。

この前リーシャが言ってたとか言ってたとか。

「よく飲むねえ……」

霞の飲みっぷりに、刀海は苦笑しながら呟いた。そういう彼も、霞並に飲んでいた。刀海は元々昼に飲むなんてことはなかった。大抵は夜に一人か、同僚を呼んで飲むぐらいしかしなかったのだ。昼からだとアルコールにより、頭が上手く回らなくなることもあるらしい。

「ほらほらあ、トーヤンも」

と、霞が刀海に注ぐ。肩を竦めながらも刀海は受け取った。唐突に、そういえばと霞が口を開く。

「トーヤン、武術すごいんやって?」

その霞の質問に頷き、「ああ」と答えた。

「親が武術の師範代でさ。やってる内に、いつの間にかここまで強くなつて…『無敵』なんても呼ばれてた」

酒を煽り、喉を湿らせる。一息ついてから、また話し出す。霞はそれに静かに耳を傾けた。

「そのお陰なんだろうな。飽きない人生つてやつを知ることが出来た」

ゆっくりと、言葉を紡ぐ。

「……世界中のいろんな奴に会つて、言葉や拳、己、思いを交わして……」そして、「幸運にも、この世界に来れた。……こうして、お前達に会つて、平和にのんびり過ごして……ずっと俺は幸せだ」

ま、前世も楽しかったがな、と微笑んだ。

霞は、何故彼がここに来たのかは知らない。それでも、ここに彼がいて良かったと思う。なんでそんなことを思ったかはわからない。それでも、こんな彼にはいつまでもいてほしい。理由なんてない。それでも良い気がした。

「……トーヤンは、今が楽しい? それとも、『天の国』にいた時、どっちが楽しいん?」

ちらりと霞を刀海が見る。その目は笑っていた。まるで、苦笑しているように。

「どっちも同じ位楽しいに決まってるだろ。そんなん、順位なんか決めらんねえよ」

微笑し、霞を小突く。そして、飲み過ぎだと言わんばかりに酒を取り上げる。

「さてさて、仕事だ仕事。ただでさえ量があるんだ。出来なかった分取り返すぞ」

それと、と更に言う。

「詠の長い説教と俺の仕事の手伝いどっちが良い？」
憎垂らしい程気持ちの良い笑顔で問われた。霞は笑顔が怖かったので、取り敢えず素直に詠の説教へ。

結局この後、詠に見つかった二人は怒鳴られて霞は更に説教。罰として、刀海の手伝い＋ をやらされることに。
素直に手伝いだけにしておけば良いものを……………。

この翌日。紙に襲われる夢を見て泣きながら霞が刀海をポカポカ叩くというシュールな光景が見れたとか……………。

第16話 日常、のんびり過ぎてゆくと ～一席目～ (後書き)

『アトガキー!』はお休みです。

第17話 日常、のんびり過ぎてゆくこと ～二席目～

雲一つ無い青い空。暖かな小春日和ねそよ風が韓欄の頬を撫でた。

「愛、おはよう」

ぼかぼかとした陽気を浴びながら韓欄 愛は振り返った。『愛』

とは、韓欄の真名である。

愛の後ろに来たのは関羽こと愛紗だ。

「愛紗様、おはようございます」

愛も笑顔でお辞儀する。

二人は、何年も一緒に過ごし、その過程で真名を互いに交換していた。

「今日も見回りですね」

「うむ、そうだな」

一つ頷き、二人は意気揚々と肩を並べて歩きだした。

+++++

二人の主な日常。

盛えた村を見回り、平和を保つ。この村では時折兵の訓練も行っており、練度も良い。賊の襲撃程度ではびくともしない、小さな街と化した村である。

そんな彼女ら二人はよく兵に動き等を教えていた。

今回は、そんな平和に暮らす二人の日常である……………。

+++++

まずは仕事の一つ、警邏から見ている。

朝は日が昇ると同時に起床。着替えて顔を洗って、中心部から徐々に外の方へと警邏の歩を進める。

特に何も無い日はつまらないまま終わってしまうが、何かあった時はやりがいのある仕事が出る。

例えば、

「さつさと金と馬を用意しろ！」

と短刀を近くの少女の首に押しつける黄巾党の一人に対し、

「手を出す者は成敗する！」

と愛紗がぶっ飛ばしたり、

「大バカ者ン！」

と村人達だけで倒しちゃったり、

「ちえいさー！」

と少女が拘束を抜け出して綺麗な上段回し蹴りを放ったり、

「わ、悪さはダメですー！」

と愛がたまたま放った金盥が脳天にクリーンヒットしたりと兎に角面白い（端^{ハナ}から見ればの話だが）場面が見られたりする。金盥辺りはツつこまないでいたきたい。何故なら……それはネット（ry
と言っ訳である。
こつして偶に起きる珍事件を処理しながら警邏を無事終える。

十十十十十十十十十十十

続いて農作業。

二人は借家に住んでおり、管理人の畑を使わせてもらったりしている。

水やりや雑草刈りは毎日行っている事だ。

「愛紗様、草取りこつちは完了しました」

「おお、愛か。ご苦勞様」

抜いた雑草を台車に纏めていた愛紗の下に、草の塊を持った愛が頬を土に汚して来た。その表情は、楽しそうに笑っていた。

「ここに入れてよろしいですか？」

小さく首を傾げる。

「うむ、私が持つて行こつ」

愛が台車に草を詰め、愛紗がそれを引いて行く。愛もその後ろから付いて行った。

その先で、ピタリと先に行く愛紗が止まった。台車を止め、脇道

の木の根元にしゃがみ込む。

「どうかされましたか？」

屈んだ愛紗の元に愛が小走りで駆け寄る。その二人の視線の先。そこには、雛鳥が一羽いた。ふと上を見上げると巣が確認できた。恐らく落ちてしまったのだろう。

「可哀想……」

眉を寄せながら愛が小さく呟いた。戻すべきだろうと愛紗に目で訴えると、彼女もコクリと頷いた。

+++++

がしかし。しかし、だ。

二人では到底無理だった。仕方なく、二人はその雛鳥を保護することにした。

「名前とか、付けますか？」

掌てのひらに納まるぐらいの雛鳥を見ながら愛は愛紗を見る。顎あごに手を当て考えている辺り、彼女も真剣である様子が充分に窺えた。

「春銀はるぎんというのはどうだろうか？」

愛紗の言葉を聞き、手の中の雛鳥を見る。淡い銀に輝く羽毛に所々に混じる春の色。とてもぴったりな名前だ。

「良いですね。では、春銀にしましょう」

「じつじつこの雛鳥は『春銀』と名付けられた。

+++++

こうして二人はゆっくりのんびり過ごしたとち。

でめたしでめたし。

.....え、オチ？
無いよそんなモン。

第17話 日常、のんびり過ぎてゆくこと ～二席目～（後書き）

アトガキ！

愛紗「どうも。関羽こと愛紗です」

愛「愛です」

愛紗「え、今回は師匠（刀海）は休みの為、私達二人が会を進めていきたいと思います」

愛「それでは早速今回の企画に移ります」

愛紗「今回は

『韓欄の紹介』

愛紗「です」

愛「では、紹介していきます」

姓 『カシ』
名 『ラン』
字 『オウセン』
『桜千』

真名 『マナ』
『愛』

武器 『なし』

容姿等々

『黒と茶色の比率1：9の髪をショートカットに。蒼眼の女の子。誰にでも丁寧な言葉遣いで少し内気。天然(?)でもある。赤いミニスカートに黒のハイソックス。黄色のラインの入った黒のブレザーのような物を着ている。泣き虫な彼女は涙腺緩め。』

刀海を追いかける為に旅に出、今は愛紗と同じ村で同居中』

愛「こんな感じになります」

愛紗「いたって普通、だな」

愛「そうですか？」

愛紗「うむ。もっとこう……何と言おうか……突っ込みたくなるような箇所が無いからな」

愛「……面白くないんですか……？」

愛紗「ま、愛。そう落ち込むな。褒めているんだぞ？ さ、次回予告に移ろうッ」

愛「……次回、『第18話 蒼神、新調すること』……お楽しみに……」

愛紗「愛……機嫌を早く治してくれ……」

第18話 蒼神、新調すること

今日は生憎の雨模様。激しくも弱くもない雨は地を湿らせる。じめじめした湿った空気はどんよりと洛陽の街を覆っていた。

雨の所為であるのか、通りには人の姿がいつもより少ない。賑わう市や店は約四分の一が静かに黙り込む始末。静まり返った表通りは道行く数少ない通行人が交わす話し声と地面に打ち付けられる雨粒の音で満たされていた。

その声の中には皆がよく知る人物もいた。真名を刀海こと蒼神

今は仮面を付け蒼刀　　が雨脚を傘で防ぎながら歩いていた。その隣には恋。刀海に寄り添うように歩いていた。つまりは相合傘。端からみればなんとも良い光景。しかし、中の二人は全く気にしていない。

それよりも、刀海は恋の方が気になっていた。腹が空いていないかどうかである。無表情な彼女から表情を読み取るのは到底無理。しかし、刀海には通じるモノがあるのだろうか。恋が何を思っているかがすぐにわかった。

「恋、腹減ったか？」

心配そうに顔を覗き込む刀海に恋はコクコクと何度も頷いた。そんなじゃ、と刀海は進路を一時変更。行き付けの飯屋に足を向けた。

昼飯にて腹を満たしたところで、本日の本題に入ろう。

それは一日前へ遡る。

「……………落ち着かねエ」

執務室にいる刀海（仮面付き）は落ち着かない様子で組む足を入れ替えていた。

何かが落ち着かない。

微妙な違和感。

以前は感じ得なかった感覚。

洛陽に来る少し前から。

そう。具体的には、水鏡塾を出てからだ。

「……………成る程、羽織るモンがねエからか」

彼は、水鏡塾を出る時に、あの漆黒のマントを預けたのだ。朱里と雛里の二人に。

今頃どうしているだろうか。二人の元気でどこことなくおろおろしていそうな姿が安易に浮かんだ。

かれこれ約十年。久しぶりに会ってみたいと感じた。

閑話休題。

結局、羽織を預っていた刀海。
不意に、ある考えが浮かんだ。

「……………そうだ。新しく作ろう」

無いなら作れば良いのだ。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

無いなら作れば良いじゃない、みたいなアントワネット的思考を纏めた刀海は、翌日となる今日、街へと来ていたのだ。

着いた所は布を取り扱っていきそうな店。

まずは良い素材を決め、それを着やすいように加工してもらおうのだ。

「まずは色……………そうだな…蒼あたりがイインかな……………」

棚に並べられた数々の色合いの布を眺めながら、青系統の布地が置かれる場所へ移動する。うっすい水色　　と言っても殆ど白のような色　　から黒に近い深い蒼まで、様々な物が並べられてい

た。

「ふむ……ここまでであると逆に迷っちゃうなア……」

ガシガシと乱暴に蒼髪を掻き乱しながら深く溜息をつく。

そこへ、隣にいた恋が刀海の袖をクイクイと引っ張った。

「ン？ どオした？」

「……これ、良いと思う」

左手は刀海の袖を掴んだまま右手の人差し指で一つの布を指した。

刀海はそれを、まるで引き付けられるように見つめた。

蒼い宇宙そそのような、蒼い海のような。

なんとも表現し難い蒼。

刀海の髪の色ともほぼ全く一緒だ。

「……………ハハツ……、ナイスだ……………」

顔に手を翳かきし、更によく見ようと仮面を取る。隠されていた表情には、子供のような無邪気な笑みが浮かんでいた。

「『ないす』？」

恋は刀海の呟いた言葉に首を傾げた。

それを見て、布を見ていた刀海は恋へと目を移す。

「良くやった、つつうことだ。良い仕事してるぜ」

二カッ、と笑う刀海。

「恋、ないす？」

「ああ。ナイスだ」

ほんと恋の頭を優しく撫でる。

そこには、気持ち良さそうに目を細める恋と、和む笑みを浮かべた刀海がいたのだった。

三日後。

「おお……」

城へと届けられた一つの荷物。それは、何故か張遼　　霞經由
で刀海の所に回って来た。

「……………」

何とも言えない刀海。言葉が何も出なかった。
中に入っていたのは、三日前に恋と選んだ布地で作られた蒼の羽
織。神々しい雰囲気醸し出すような色の蒼が目飛び込んできた。

「なあトーやん、着てみてくれへん？」

荷物を持ってきて部屋に残った霞が期待に満ちた目で促してくる。
刀海はおお、と小さく返事をし、中から羽織を取り出す。手から
広がり、地面に向かって流れ落ちる蒼。

蒼き海と宇宙をイメージさせるその色は、羽織には少々手厳しい
刀海を有無と言わさない程美しかった。

脇で見ていた霞も、感嘆の声を漏らしていたのが感じられた。

布をよく伸ばして、体の周りを回すように羽織る。
その際に、腕に隠れた顔に仮面を付ける。

羽織のはためきが完全に納まった頃。蒼の羽織を見事に着こなす、
蒼刀がそこにいた。

「こりゃア……いいねエ」

仮面の上からでもわかるぐらいの生き生きした声が、霞にはよく
聞こえた。

第19話 遠征、意外と許可が取れたのこと

蒼神 蒼刀とも言える が急にこんな事を言ったのはほんの三刻程度前だ。

「ちよっくら出てくる。三ヶ月ぐらい?」

勿論、詠は激怒した。

「なんなのいきなり! ボク等の意見も聞かずに出るなんてさ!」

「わーったわーった。スマンね」

「本気で謝ってるのツ!?!」

「三割方……」

「バカッ!」

「そーですよそーですよーだ。どーせ俺はこの世に一人しかいない世界一のバカだよーだ」

「ちよっ、そこまで言っではないでしょ……」

詠の一言にしゃがみ込んで指で地面に『の』の字を書き始める刀海。

自分がバカと認めていても、面と向かって断言されると流石にシヨククだった。

自室へと戻る中、刀海は思案していた。

現状の把握も込めて今回の遠征の話を彼は出したのだ。噂と直接見るのでは、信用の度合いが違う。

刀海は自由気ままな放浪者だ。

決めごとは大抵真面目にやる方である。

「……よし。孫策の所に行こう」

が、結局、この発言も気まぐれになってしまうのだが……。

+++++

「ねえねっ、今日はドコ行くの？」

遠征まで後二日。

洛陽の中心街を遠征の為の物資の購入（という名の散歩）で訪れた刀海は、傍らに一人の少女を連れていた。

新緑の黄緑色の髪を、肩まで伸ばし、後ろでポニーテールにしており、その結ばれた髪のところだけを長くし、地面スレスレまで伸

取り敢えず人目を避ける為に刀海は跳んで ジャンプして、
だ あの場を離れて人通りの少ない所に来ていた。

「怖かった！ スツゴい怖かった！」

「わかったわかった。わかったからその力で叩くのはやめい。青痣
が出来ちまう」

「バカバカッ！」

仕返しとばかりに刀海をぼかばかと叩く奈々。時折仮面にあたっ
たりして、仮面も今は左眼辺りが無くなっていた。

「……確かに俺アバカだけどよオ……」

眉を寄せながら奈々の指摘を受ける刀海だが、その動作は自分で
はないもつと他へ向けたものだ。

「……首締めて来たのはそっちだろ？ コリヤ自業自得つつうモン
じゃねエのか？」

その言葉を聞いて奈々は硬直する。

次第に顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「……怖かったもん」

「……そうかい。そりやすまなかつたな」

ぼんぼん、と頭に手を置く。

拳の嵐は止むかなあ、なんて考える刀海。その考えは、約三秒で
消え失せた。

「怖かったんだよ！ バカ！」

目にいっぱい涙を溜めて、何故か中段突きを放ち、その拳は吸い
込まれるように刀海の鳩尾に正面から この時彼はしゃがんで
いたので クリティカルヒットした。

「ぐオッ!？」

まさかの追撃を弱点に食らった刀海は、痛みに悶えた。

「……orz」

「……『おーず』?」

「……何でもない」

俯せに伸びながら静止する刀海。いくら無敵でも痛かった。

「……あ、えつと……大丈夫?」

「…………多分」

一向に起きない刀海を心配したのか、奈々が近くに座り込んだ。

「あー……早く起きた方がいいよな?」

コクコクと真剣に奈々が頷く。

刀海はそれを視界に捉えて起き上がった。

「イテエイテエ。ちったあ自重してくれ」

「はい」

奈々の気の無さそうな返事に口を開きかけたが、まあいいか、と

刀海は割り切った。

「行くぞ」

「ウン！」

羽織に付いた砂を落として、仮面を修正。奈々に手を差し出した。

奈々はその手を握る。

刀海のこれは癖であるのだ。約十年前の二人のお陰である。

刀海と奈々の二人は、太陽の照らす表通りへと足を向けた。

第19話 遠征、意外と許可が取れたのこと（後書き）

アトガキ！

刀海「久しぶり。そして、あけましておめでとう。刀海だ」

奈々「奈々です！」

刀海「さて、新年を無事に迎えられた。作者もこの作品がそれなりに好評で喜んでるぞ」

奈々「ねーねー。作者が何か言ってるよ」

刀海「ん？ …… ああ紹介ね」

奈々「え？ 誰の？」

刀海「お前だお前。さて、今回は奈々の紹介だ。そんなに詳しくは書かないからな。また、同作者の『作品のご案内』に書く予定だから、そつちを見るのも良いらしいぞ。そんじゃ、いつてみよう」

姓 星

名 南

字 翔葉

真名 奈々

ライトグリーン of 肩までの髪で、ポニーテール。ただ、縛った髪は、地面すれすれまで伸ばしてある。

身長はロリな子達と一緒。

服装は、白い七分袖の上に水色の小さな羽織を着ており、下は、黒

い袴を履いている。

武官。

攻撃方法は、鎌に鎖を付けたものを使う。

強さは張遼より少し上。

天真爛漫な少女で、刀海にべったり。

彼が仕事中の時は大人しく待ってるが、終わった後は寝るまではなれないという信念を見せる。

ことのつまりはめっちゃ刀海に懐いているということ。

刀海「ホント、紹介通りだな。この前なんか風呂にまで着いて来ようとしてたし」

奈々「絶対に離れないもん！」

刀海「はいはい。そんじゃ、今日はここまでだ。次は、次回予告」

奈々「次回、『第20話 蒼刀、孫策に出会うのこと』！」

刀海「そんじゃ、お楽しみに」

第20話 蒼刀、孫策に出会うのこと（前書き）

遅くなりました。
すみませんでした。

第20話 蒼刀、孫策に出会うこと

穏やかな日差しを浴びる中、五人の姿が整備された。別に石が敷き詰められている訳ではないが、それなりに綺麗なのだ。道を、ゆつたりのんびりと歩いていた。

「……うん……」

その中、蒼刀 中身蒼神 が、奈々を前に抱えていた。腕の中の奈々は、刀海に身を委ねてスヤスヤと熟睡中だった。

「なァ」

「何でしょうか？」

刀海と奈々の他三人は、彼らの護衛だ（因みに男一人に女二人となっている）。

刀海が話し掛けたのは、男の方だ。

「後、どんくらい掛かるんだ？」

「そうですね……大体、今日を入れて二日は掛かるかと」

「……ホントにか？ ガチでか？」

「本当、ですね」

このまま背負いつぱなしかよ、と刀海は内心大きく溜息を吐いた。幸いにも、仮面のお陰で表情は読めなかった。

時は翔び二日後。

刀海一行は……何？ あの後どうしたかった？

歩いたよ。グダグダグダグダ歩いたんだよ。

知りたい？ 知る必要ないでしょ？ だから省いたんだよ。

べ、別に手抜きじゃないんだからねッ！

……………げふん、げふん！

ってな訳で、刀海一行は、まず袁術の所へと来た。

「……………で、そなたらが何の用じゃ？」

「アア。ちよいと、雑務の仕事やら、色々と見学させてくれねエか？ ベンキョーつつうやつだ」

刀海の返答に袁術は首を捻った。

「七乃、どうするのじゃ？」

「はあ…特に害は無さそうですから、脇から見ていただけなら大丈夫でしょう……………」

「ふむ…それでは、そちの頼み、受け入れよう」

「クツクツク、ありがとな」

目の奥で笑う刀海。

七乃と一言二言交わした後、刀海一行はその場を後にした。

十十十十十十十十十十十

それなりに広い廊下を刀海は一人歩いていた。

目的は、ナシ。

「あら？ 見ない顔…っていつか仮面か……」
と、前から声がかかる。

横に向けて外を見ていた視線を前にもってくる。

そこには、桃色の美女。

(……孫策、か)

顔色を変えないよう、自然に動く。「よオ」

「何、新入り？」

「新入りつつうかなア……まアちよいと見学だ。世話ンなるから、ヨロシクな」

「おお、そついうコト！

こつちもよろしくね」

互いに手を差し出して、握手を交わす。

「アナタ、暇なの？」

「暇っちゃ暇だな」

「ならちよろつと着いてきて」

「他の奴の紹介でもすんのか？」

「」名答「」

ウィンク　この時代では何と言うのか刀海はさり気なく考え
てみる　をし、孫策はくるりと回れ右。刀海の返事を待たずし
てつかつかと歩きだした。

暇な刀海も、断る理由は無いので素直に着いていくことにした。

十十十十十十十十十十十十

星南こと奈々は、ある一室である一人の将といた。

「……そんなに飲んで大丈夫なの？　昼間だよ？」

「何、こんぐらい、堪えはせん」

からからと、年配

げふんげふん！　美女が笑った。

「南殿も如何かな？」

「私知らないもん。ししよと一緒じゃないとヤダ」

奈々が話しているのは黄蓋。現在進行形で酒を煽っているところ
だ。（因みに、奈々の言う『ししよ』とは、手解きを受けている
刀海のことである）

「ししよ、というのはあの仮面の者か？」

「そーだよー！」

「奴は『天下無双』か？」

「全然！ 『天上天下天地無双』！」

「ほう…そりやまた凄いのう」
にたり、と笑った。

しかし、奈々はそれに気付くことはなく、刀海のことを何刻も語った。

不意に、扉の外に気配を感じた。

「祭、いる？」

「策殿か。いるぞ」

「入るわね」

入って来たのは孫策。そして、蒼刀こと刀海だ。

「あ、ししよー！」

刀海が入って来るや否や、奈々はパタパタと駆け寄って刀海に飛び込んだ。

「ほお、お主がこやつ言う」

「アア、蒼刀だ」

「黄蓋じゃ。よろしくの」

互いに手を出し、握手を交わした。

「ところで刀殿」

「ン？」

「こやつの話に寄れば、武が優れているとか。『天上天下天地無双』
と言っておったぞ？」

「なんと大袈裟な……」

チラッと奈々を見るが、刀海の視線に奈々は全く気付いていなかった。奈々が気付いていないフリ等出来ないだろうしな、と刀海は考え、仕方なく割愛。

「一つ、手合わせ願えんかな？」

予想通りの言葉が、刀海の耳に吸い込まれる。仕方ないとばかり

に溜息を吐いた。

「良いだろう」

「あ、じゃあ、私もいい？」

「何故に乗るし……」

「いいじゃない」

こりゃ折れるのコツチだな、と刀海はしみじみ感じ、仕方なく首を縦に振ったのだった。

+++++

結局（内心やるのが嫌だった）対決の形になり、彼ら四人は修練場の端に来ていた。

「そんじゃ、最初はどっちだ？」

蒼の羽織を脱いで奈々に預けた後、軽く肩や腰を捻って準備運動。

ひとしきり体を伸ばした時、黄蓋が一步前に出た。

「では、儂からいかせてもらうぞ」

「ドンと来い」

刀海が姿勢を但し、まっすぐに黄蓋を見る。二人が、ゆっくりと礼をし、頭を上げた。刹那、一方が仕掛けた。

長剣を持った黄蓋が、物凄い速さで下から振り上げるように剣を振る。つ。

しかし、刀海はそれを上回る動きで後ろに跳んで避けた。
横、縦、突き、フェイント。ランダムに振るわれる剣を、彼は軽
々避けて行く。

「はあああああッ！」

黄蓋が地面を蹴り、剣の切っ先を刀海ひょうていきに向け突貫。完全に捉えたと感じた。

しかし、

「何ッ！！？」

刀海が左足を軸にクルツと時計回りに回って、剣を避けそのまま黄蓋の右側に出たのだ。

咄嗟に身の危険を感じた黄蓋は、体を無理矢理捻って刀海とは反対の左に跳んだ。

直後、すぐ真横で、ヒュボツ！ と空気を叩く音が聞こえた。

「失敗、か……流石だ」

見ると、丁度、掌打を突き出した刀海が立っていた。

「……ほう……速い……」

完全にタイミングを外されていた。それを黄蓋は素直に褒めた。

「オマエもな。経験の量も、伊達じゃあないしな」

体勢を整え、構えを解いた刀海が言った。

「……やっぱり風は肌で感じなきゃだなア」

「何がじゃ？」

「ほらア、俺仮面着けてンじゃんか。やっぱり気配とか感じ辛いワケ

ヨ。だから……、」

仮面に手を当て、軽く払う。すると……、

「こっする」

仮面が、右頬の辺りの一部を残して消え去った。

露あらいになる彼の変色した眼。不思議な色合いのソレに、黄蓋は暫し見惚みとれた。

「フウ……仮面取るなんてのは、いつぶりだろうなア……」

口調は変わらずとも、仮面の下にあった表情はよく見える。その顔は、久しぶりに外の風を浴びた者のそれだった。

「続きと行こうか」

「望むところ。…行くぞ！」

ダンッ！ と黄蓋が地面を蹴る。

刀海も同時に前へ出た。

黄蓋が勢い良く剣を振るう。

しかし、刀海は何もせず、ただ真横を擦り抜けた。

一瞬、黄蓋の動きが止まるが、すぐに剣を構えようとしたが、手の中に剣が無いことに気付く。

「オウ、コツチだコツチ」

声の主の方を見る。その手の中で、さっきまで構えていた剣が弄ばれていた。

「…なッ……!?」

その光景に、黄蓋と孫策が声を上げた。

一瞬の擦れ違い。その間に相手の武器を違和感無く奪い取る。

孫策からは拳動等全く見えなかったし、本人である黄蓋も見切れなかった。

「武器を構えろ。ホレ、槍だ」

刀海の手には槍が現れ、それが黄蓋の元に投げられた。槍は、足元に刺さる。

「第二戦だ」

「いいだろう！」

互いに頷き、今度は刀海が先に踏み出す。迎え撃つのではなく、自ら攻撃を仕掛けるようだ。

繰り出される肘突きエルボ。そこから腕を伸ばし、裏拳を叩き込む。

黄蓋は二つとも槍を横にして防いだ。

しかし、刀海の猛攻は止まらない。

更に踏み込み、左手の掌打を打ち込む。

それを槍で受けると、ガンッ！ とあり得ないような音が修練場に響いた。それでも、槍は折れなかった。

ブワツ、と刀海の体が浮くように宙に踊った。宙で回り、右回し蹴り。更に体を捻って左蹴り。

刀海が黄蓋に背中を向けて着地。そこからバク転の容量で上から蹴りを放つ。

それを難とか槍で受けた黄蓋は、急いで後ろに下がった。猛攻を避ける術を持たなかった黄蓋は全て槍で受け止めた為、腕は痺れていた。あの威力の攻撃を受けても槍はビクともしていない。

一息吐くかと思われたが、すぐさま刀海は距離を詰めて来る。

黄蓋は受けるのを諦め、避けに専念する。

攻撃はなるべく避け、避けるのが無理であれば最小限の力で回避。疲れてくれれば、と考える。

しかし、その考えは甘かった。

「逃げてバツカじゃ、勝つこともできねエぞオ！」

あの激しい動きの攻撃にも関わらず、刀海は汗一つ掻いていなかっただ。

「……やはり……本命が良いのウツ!!！」

「カツ！ そんなら変えな。待ってやる」

「感謝するぞ」

その言葉に攻撃がピタリと止む。いつの間にか修練場を張り詰めていた空気も霧散した。

「祭！」

「おお、策殿！ ありがたい！」

黄蓋が槍から手を離すと、それは自然に消えた。代わりに孫策から弓矢一式を受け取り、矢をつがえて弓の弦を引く。ギチギチと、引き契られる音がすぐそばで発せられた。

「……来い！」

「遠慮なく！」

限界にまで込められた力が一気に解放。矢はまっすぐに刀海に向かつて行き……、

「ホイッ！」

当たるとは無く、刀海が掴み取った。

黄蓋は気に留めず、次の矢を構えた。数は…、三本。

ヒュヒュヒュンッ！ と風を切り、刀海に迫る矢。刀海はその僅かな隙間を潜るくぐるように躲しながら前進する。

黄蓋からの矢は止むことはない。

僅かな時間差タイムラグで射ちだされる矢は、とめどなく彼を襲う。

刀海は矢を掻い潜りくぐ、時に掴みながら攻撃を躲して行った。

遂に、互いの距離が僅か十歩の所にまで来た。

ジリジリと迫られる黄蓋。隙を見せぬよう、ゆっくり、ゆっくりと後退する。

一気に五本の矢を飛ばす。

横に躲するのが無理と判断した刀海は後退ではなく、前進した。

「ッ！？」

予想していない動きに釣られ、黄蓋自身の動きが僅かに鈍った。

矢と矢の間を縫うように体を回転させて潜り抜ける刀海。

回避終了と共に地面に伏せ、全身のバネを使い、黄蓋へと躍りかかった。

黄蓋は後退しながら矢を一本だけ手にかけた（と言っても、気が僅かに動転し、一本しか取れなかっただけなのだ）。

矢をつがえようと腕を動かそうとしたが、それよりも速く刀海が矢を持つ黄蓋の右手を左手で掴み、浅く指を曲げた右手は黄蓋の眼前で止められた。

「……どうする？」

「…負け、と認めよう」

よろしい、と刀海は手を離す。

「まさか、祭がここまで封じられるとはね……」

孫策が、苦笑を浮かべながら歩み寄って来た。

「惨敗。悔しいのう」

「何、もっと努力すればいいさ」

「それもそうじゃな。……そうじゃ、儂の真名を預けよう。真名は祭じゃ」

「いいんかい？ そんなじゃ、俺の真名は刀海だ」

「二人とも？ じゃ、私は雪蓮よ」

「いいのか？」

「ええ。なんかアナタ、悪い気はしないのよねえ」

「『勘』か？」

「そうなるわね。ま、いいじゃないの」

「そうかい。じゃ、ありがたく預かるう」

刀海は苦笑し、じゃ、次行こう、と雪蓮を促す。それに、彼女は頷き返した。

+++++

「じゃ、早速やりましょ？」

スラリ、と孫策が鞘から長剣を抜き、切っ先を右斜め下に向けて構えた。

「ウシ、いいぞ」

刀海も、『氣』で創った大太刀を右肩に担ぎ、腰を落として左手を少し前に出した。

始めの合図はない。

無声無音の時間が酷く長く感じられた。

そよ風が吹き、二人の頬を撫でる。

一羽の鳥が木から飛び立った瞬間、同時に動き出す。

約十歩の距離を詰め、すれ違う。

直ぐに振り返り、また構える。

「……っ」

いつの間にか止めていた息を吐き、体に入った力を抜く黄蓋。それだけこの場が緊迫した状態にあったということだ。

再び、二人を見た。

『氣』のぶつけ合い。実際には見えないし、そんなことはしていないのだが、何故かやっていそうな雰囲気だ。

その姿を、黄蓋は食い入るように見つめた。

もう、手汗等気になっている場合ではなかったのだ。

刀海が構えを変えた。

右半身を引き、右手に持った大太刀の刃を上。左手の先を刀身の背に添えて、半身に構えた。

再び静寂が訪れる。

動かないなら、と次は雪連が駆け出した。

腕を軽く引き、防御と突きが出来る体勢を作り、更に距離を詰める。

あと一步で刀海の間合いに入る。そして、そこに体が僅かに滑り込んだ時だ。

いつの間にか、大太刀の切っ先が雪連に迫っていた。咄嗟に剣を振り、その軌道を逸らして沈み込んだ。

かなり距離を取り、刀海を見据える。

(……拳動が全く見えないなんて……)

先、雪連に向かって突き出された大太刀の切っ先。その時の彼の動きが雪連には何もと言っていていい程見えなかったのだ。

いつでも受けに回れる体勢でいたから良いものの、完全に攻めに向かっていたら、戦場であれば今ごろ自分は喉元を貫かれて絶命していただろう。

そう考えるとゾツとする。

冷や汗が、こめかみを伝う。

恐ろしい程の鍛錬を積んだ相手。

身震いは、恐怖。そして、歓喜を表した。

これほどまでに強い相手。そうそう巡り会える者ではない。

「面白いわね」

知らず知らずの内に漏れた独り言。

雪連と刀海が口角を上げた。

しかし、笑っていても構えは崩れない。

再び刀海が構えを変えた。

大太刀を左側の腰の高さに持っていき、刃を後ろに出し、左足を軽く引く。

抜刀の構えだ。

微動だにしなくなる刀海。

五感で風を、気を、全て感じ取り、無駄なモノを一切追い出して行く。

出来上がる二人だけの空間。無音の支配する世界。

雪連の剣の先が僅かに揺れる。

その刹那の瞬間に刀海が目にも止まらぬ動きで刃を抜刀した。迫り来る漆黒の刃は雪連の首元でピタリと止まった。

勝敗は火を見るよりも明かとなる。

「……私の負けね……」

構えていた剣を下ろし、悔しそうに笑った。

「中々に楽しめたがな。手応えもあったから、丁度良かった」

刀海も大太刀を消し、手を前へ出した。

「今日はありがとな。色々と、学ばせてもらうつこもあったしな」

「そう？ こつちも楽しかったわ。アリガト」

雪連も刀海の手を握り、互いに強く握手を交わす。

いつの間にか空は太陽の紅に染まっていた。

第20話 蒼刀、孫策に出会うのこと（後書き）

ア・ト・ガ・キ！

刀海「よう。また久しぶりだな。刀海だ。今日は作者の都合でゲストがないから……」

…よつと。「」はナシで喋らせてもらうぞ。

今回こんなにも執筆が遅れたのには訳があつてな。まあ、訳になるかどうかは知らんが。

作者は連載六本抱えていて、そんで色々書き回っていた所為で恋姫に中々手が回らなかつたそうだ。

こんなにも長くなったのは区切りが悪過ぎたつてコト。許してやってくれ。

結局、書き溜めも在庫切れでネタも皆無だからまだまだ時間が掛かるらしい。

気長に待つてほしいとのことだ。

さて、グダグダも嫌だろうから、次回予告に移る………といいたいところだが、まだタイトルが未定らしい。

取り敢えず、次回お楽しみに。

これからも、『真・恋姫十無双〜無敵の神の御使い〜』をヨロシクな。

第21話 意地、見せ付けるの1つ

こちらに遠征をしてから一週間が経った朝。

袁術の配下の将が玉座の間に集められていた。

尚、刀海等は別の場所から聞き耳を立てている。参加しているのは、刀海の護衛の一人だ。

「うむ、集まったようじゃな」

座ったままの袁術が大層偉そうに頬杖を突きながらそれぞれの顔を見渡した。雪蓮達にとってみれば不愉快極まりないが、主たる袁術に今は逆らえない。

「……そういえば、蒼刀とやらはどうした？」

袁術が首を捻るのを見て、刀海の護衛が前に一步出た。

「我が主は朝に弱く、この場にはおりません。代わりとして、私が馳せ参じました」

「そうかそうか。客ならば仕方ない」と、興味なさそうに首を振った。

勿論、彼の言い分は嘘で、刀海はこの部屋に潜んでいる。誰も気付いてはいないが。

「さて、今日はじゃな。賊の討伐に向かってもらおう」

「して、数は？」

雪蓮の隣に控える周瑜が袁術を睨む。

「はい。敵兵は10000弱。拠点も判明しているので、それごと潰しちゃって下さい」

張勳は朗らかに笑顔を浮かべるが、雪蓮達是对して良い表情を浮かべず、逆に顔を顰めた。

「ちよっと袁術ちゃん、兵力差とか考えてるのかしら？」

「む？ 自分の兵等自分で管理するのが普通じゃろう？ ま、頑張るのじゃ」

それより七乃く蜂蜜水が飲みたいのじゃく、と袁術が早くもこちらから興味を外し、張勳も、はいただ今く、と嬉しそうに頷いていた。

雪蓮達も呆れ返って反論する気も失せたので、玉座の間をさっさと退室する。

張勳も蜂蜜水を取りに奥に消えた。

自然と一人取り残される形となる袁術。途端に心細くなるのは気のせいではあるまい。

「……暇じゃのう」

ポツリ、と。

さりげなく呟いた。

「そんじゃ、暇潰しでもすつか？」

突如、自分の真上からかかる声に袁術は身を震わせた。

「なッ……蒼刀!？」

視線の先には、あの彼がいた。

「お、お前、いつからいたのじゃッ!？」

「いや、『うむ、集まったようじゃな』辺りからな」

「殆ど最初からではないかッ!？」 袁術が憤慨の表情となるが、

刀海は気にせず言った。

「イイじゃんか別に。さ、暇潰し開始だ」

二日後。

孫策軍と刀海等おまけは、その賊の拠点のすぐ近くにまで来ていた。現在は待機中であり、偵察が帰って来次第進撃開始の予定だ。賊の勢力は約10000以上。比べてこちらは2000以下。差は明らかに五倍以上で、勝率は圧倒的に低かった。

「敵はざつと10000」

「ししよは出るの?」

「出ようか、出ないか。奈々が決めてくれ」

「じゃあ、ししよは観戦してて! 私が行く!」

「そうかい。頑張つて来いよ。序でに、絶対に無いとは思うが、死ぬなよ?」

「はい!」

孫策軍の傍ら。

刀海達の集まり(五人)の中で、刀海と奈々が話し合っていた。

良い返事だ、と奈々の頭をわしゃわしゃ撫でる。

「多分、孫策軍から将が出るだろうからそいつに付いていけ。吉報を待ってる」

＋＋＋＋＋

「星南さんですね。よろしくお願いします」

「うん、ヨロシク！」

孫策軍陣営。

奈々は呉の将、周泰と合流していた。

「星南さんの武器は？」

「私はコレ！」

と、奈々は独特な形状をした武器を取り出す。

棒の両側に一定方向に鎌の刃が向いており、棒の片方からは長い鎖がじゃらじゃらと付いていた。

「凄いでしょ！ ししようが選んでくれたんだ」

「へえ〜。それが今は丁度良いんですね」

「そうだよ！ と奈々は笑う。」

「明命！、行くわよー」

離れた所で雪蓮が手を振っていた。周泰もそれに「わかりましたー！」と答え、奈々とそちらに駆けつけた。

＋＋＋＋＋

回転する刃が、遠心力の力も加わり、賊を一掃する。迫り来る矢は鎖で絡め取り、時に弾く。それが今現在、奈々の戦い方だ。彼女が得意とするのは、武器の特性から見て、近距離や遠距離ではなく中距離の間合い。

彼女独特の戦法は、他の者の眼をよく引いた。

例え、奈々の間合いの内に敵兵が潜り込んで来たとしても、隠密行動を得意とする周泰が斬る。

初めての共闘としては、実に息の合った二人だった。

「やあッ！」

鎖を飛ばし、敵の首に絡ませて振り回す。一周したところで敵を投げ、その遠心力を繋げて鎌の刃を鋭く振るう。それだけで、三十人近くが地に伏した。

少し離れた場所では、周泰が敵の死角から死角へ移動し次々と敵兵を沈黙させて行く。

「……凄いわね」

前衛二人が作った道を進軍しながら雪蓮が呟いた。

周泰は兎も角、あの星南は強い。確かに、あの武器の場合は間合いを崩してしまえば良いだろうが、まず間合いを崩すところまで行けるかどうかすら怪しい。

過大評価ではない。純粹に強いのだ。

「どうよ、ウチの奈々は？」

と、後ろから声がかかる。蒼の羽織に和服、仮面に身を包む刀海だ。

「素晴らしい武の持ち主ね。信頼を掴み取るのも上手いし、明命とも意気投合してるしね。何れにせよ、評価は高いわ」

成る程、と雪蓮の言葉に刀海はウンウンと頷いた。

「あの武器、アナタの特注品なんだった？」

「アア、アレか。俺がアイツの癖とかを見て一番ピッタリなのを選んだ。非売品だぜ」

「へえ。意外と顔が利くみたいね。前に聞いた『神の御使い』とそっくり」

「ハツ。『神の御使い』、ね」

俺がソレなんだけど、とは言わず心の中に仕舞い込む。

「相手も大分減ったナア。このまま押し込んでも勝てる」

「そうね。アナタも出る？」

「いや、今回は休みだ。奈々に言われたんでな」

刀海は首を横に振る。

「今日の主役は奈々であり、俺は傍観者だ。端でゆっくり見させてもらおう」

+++++

孫策軍（とオマケ）は無事に賊の拠点を制圧。

こちらの損害は1000人。

やはり、奈々の活躍が大きかったこともあったのだろう。雪蓮達も奈々を良く良く褒め称えていた。

余談だが、奈々は周泰と真名を交換。周泰は明命というらしい。
あの時の奈々はとても嬉しそうに笑っていた、と刀海は後に語っ
た。

第21話 意地、見せ付けるの(後書き)

ア・ト・ガ・キ!

刀海「

.....」

キョン「主人公ー!? 小説読んでないで! 始まつちまつたよ!

刀海「...ん? おおそうか。よ、刀海だ」

キョン「なんつうマイペースな人だ.....。どうも、作者のキョンです」

刀海「んで、今回は作者がゲスト?」

キョン「そ。てな訳でフリートーク(?)と行きましょ」

刀海「今?」付けたな。長く続くかわからんから。取り敢えずア
ンタに任せるから進めちゃってくれ」

キョン「ちよい! だからって小説読むな!ん? 何読んで
んの?」

刀海「インデックス。んで、これ終わったらIS読む」

キョン「何!? ISなんてまだアニメしか見てねえぞ!? 早く
原作集めねば!」

刀海「つーかMF文庫の背表紙とかわかんのか?」

キョン「知らん! けど根性だ!」

刀海「で、見つからなかったら注文すんだろ? Amazon辺り
で」

キョン「な、何故わかった.....ッ!?」

刀海「いつもそうじゃん。Amazon送料無料だとフル活用して
たし」

キョン「まさか.....、エスパー!? 恐ろしい子!」

刀海「エスパーじゃない。無敵だ!」

キョン「『桂だ!』みたいに言うな!」

刀海「ま、それは良いとして」

キヨン「良いんかい……」

刀海「何の話題？」

キヨン「確かアンタが今読んでる小説」

刀海「ああ。これ（インデックス）ね。今17巻の途中」

キヨン「友達情報だと三月ぐらいに23巻発売とか言ってた
っけ？」

刀海「エセ情報じゃねえの？」

キヨン「さあ？ 今は待つしかないだろうし」

刀海「……AmazonでIS買おう」

キヨン「アンタも活用してんのかい！」

刀海「さて次回、『第22話 相棒、出会うのこと』」

キヨン「何が『さて』なんだ全く……取り敢えず、お楽しみに」

キヨン「……ふう。刀海いなくなっただし、ここでお知らせです。活動報告でもチマチマ報告してきましたが、この恋姫を目処に全作品の改稿作業に移ろうと思います。その為、全ての作品の更新を今回一旦停止します。と言ってももしかしたら更新するかもしれません。割合的に二割ぐらいですがね。この作品を見てくださっている読者の皆様には多大なご迷惑をおかけしますが、何ぞとご了承下さい。またいつか、お会いしましょう。それでは、失礼します」

第22話 相棒、出会うのこと

「愛、そろそろ自分に合った武器を持つてはどうだ？」

愛紗がそう言ったのは、ある日の昼下がりであった。

「武器…ですか？」

「うむ。中々に素質もありそうだし、これから旅に行く為にも護身に必要になってくるだろう」

彼女ら二人もそろそろ旅に出ようと考える時期だ。『神の御使い』たる蒼神に会う為にも早く行きたい。

「確か、倉庫に師匠が武器を色々としまつてある筈だ」
そう言つて愛紗は倉庫へと愛を引きつれた。

倉庫を開けると、入口側は綺麗だが、奥へ行く程埃や汚れが目立ち、お世辞にも整つていないとは言えない有様だった。

ここまで来たのも師匠が村を出た直後以来だったろうか。愛紗はかなり昔を思い出す。

武器が収納されているのは倉庫の奥。長屋の二乗くらいあるこの倉庫となれば、更に進むしか道はない。

埃を吸い込まないよう口に布を当てながら二人は歩を進めた。

暫く歩くと、武器が沢山置かれた広い部屋へと出た。

「……すごい……」

思わず、愛の口から感嘆の言葉が漏れる。

槍、弓矢、長剣、偃月刀……、倉庫には所狭しと様々な武器が納められていた。

独特な形をした物もあり、愛の知らない武器までがあった。

「全て師匠の特注品だ。私はこの中から青龍偃月刀を戴いた」
そう語る愛紗が大事そうに持つ青龍偃月刀を愛に見せた。

「……今頃どうしているのだろうか……」

どこか遠くを、愛紗は見つめた。

「……これは……、」

と、愛が一振り^{マナ}の刀を手に持つ。

「それは、師匠が特に力を入れていた物だ。『かたな』と言っていたぞ」

愛紗の言葉に相槌をうちながら手の中にある刀をまじまじと見つめた。

柄から鞘まで全てが漆黒に染まった物。柄を手に取り、スラリと刃を抜く。

その刃は鞘の漆黒に反比例して、眩しい程の白銀の光沢を放った。

「……師匠そっくりな構えだな……素質でもあるんじゃないか？」
「？」

愛紗の言う意味をあまりよく理解していないご様子の愛。

自身の体勢を見ると、左腰に刀を当てて柄を握っている。所謂、

抜刀の構えだ。

その姿を見て、愛紗はあることを思い付いた。

十十十十十十十十十十十十

愛は柄に『獅刃^{シバ}』と銘打たれた木刀を握り、愛紗と向き合う。
対する愛紗は木の偃月刀を構えていた。

愛紗の策（思い付き）は、その武器の特性を知る為実際に打ち合っただけのことだ。と、言っても真剣を使う訳にもいかず、『師匠』の置いていった木刀『獅刃』を使うことになっていた。

獅刃を抜刀の構えに。

木刀では抜刀に相性が悪いが今は仕方ない。感覚を掴まないことには意味がないのだから。

『抜刀術』というのは瞬発力からくる威力と速さにある

』

と『師匠』の書いていた書物にはあつたらしい。

瞬発力を出すには力んではいけない。

より『無』の状態からより『最高』の状態の差。そこから瞬発力は生まれ、それを刀に乗せることにより、威力・速さ・斬れ味の三位が比例して倍位上に跳ね上がるとかなんとか……。

兎に角精神状態を極限状態にまで落ち着かせて力を抜き、そこからより早く『最高』の状態にすれば良いのだ。

呼吸を整えてただ愛紗のみを見る。

音が消え、景色が消え、二人だけの空間が出来上がった。

十 十 十 十 十

場の空気が変わったのを愛紗は敏感に感じ取った。

（……中々に素質がある）

初めて刀を扱うにしては、熟練されているように見える。

構えは『師匠』と比べてまだ少し修正が必要だが、やり方は間違

っていない。

後は、愛と刀を引き合わせるだけだ。
その為には、

(兎に角経験を積みさせることにある！)

偃月刀を強く握り、愛へと突貫する。

左からの一閃を入れようとする。

スローリングの世界で、偃月刀の先が届く

瞬間、愛が愛

紗の視界から消えるように一步を踏み出し、ゆっくりと流れる世界
の中ですら捕らえきれない速さの斬撃が、首元で寸止めされた。

「……………」

「……………」

静寂。

その中で、愛がへたり込んだ。

「はっ、はあ……………はあ、はあ……………は……………」

肩を上下させながら自身も驚いたような表情で愛紗を見つめた。

「……………あれ……………？」

腕、腹、脚、全てに力が入らず、立つことすら出来ない。

「ど、どうした?! 何が……………!?!」

「…わ、わからないです。ただ……………、疲れたみたいに手足が動かない
くて……………」

師匠であれば、何かわかったのかもかもしれない。愛紗は思ったが、
残念なことにはここには彼女の師匠はいない。

「一旦休もう。日頃の疲れが一気に来たのかもかもしれないな」

愛紗はそう割り切り、愛を背負って自宅へと向かった。

彼女の立っていた後ろの大地が跡形もなく吹き飛んだとも知らず
に……………。

第22話 相棒、出会うのこと（後書き）

短いけど重要なんです。すみません……。

第23話 迷子、保護されるの1つ

照りつける日差しは暑過ぎず。吹き抜ける風は涼し過ぎず。所謂晴天日和の日だった。

「今日も良い天気ですね。~~~~~っ!」

ぐぐぐ、と精一杯伸びをしながら少女 朱里は空を仰いだ。今日も雲一つ無い快晴。出歩くには持って来いの天気である。

「そうだね、朱里ちゃん……ふぁ……」

朱里が伸びをする中、隣の娘 雛里は眠そうな目を擦りながら籠を担いでいた。

今日も今日とて山に山菜摘み。いつも通る道を二人で手を繋いで歩く。

そこで一つ、問題が発生。

「……人、ですかね？」

「……人、だよな」

一人の少し大人びた女性がうつ伏せに倒れていた。

燃えるような紅色の髪の毛。体には色の落ちて汚れた藍色の羽織を巻いており、体中に打撲や切り傷があつて、実に悲惨な姿だった。

「……う……」

僅かに、呻き声が口から漏れる。

「はわわッ! ど、どどどうしよう!?!」

「あわわッ! しゅ、朱里ちゃん、おちやちゅいちえッ!」

二人がまず落ち着け。

取り敢えず、自分より大きい人を担ぎ、来た道に戻る。

「ご迷惑をお掛けし、本当にすみませんでした」

「構いませんよ。怪我もしていらっしゃったのでしょう？ 安静に、休んでいて下さいな」

倒れていた者の名は仙鈴^{シエンリン}、字は赤夢^{セキム}。助けてくれたお礼として真名も交換し、彼女は『瞬^{シュン}』というらしい。

「帰る場所がありますか？」

水鏡が優しく微笑みかけるが、瞬は逆に哀しそうに顔を伏せて首を横に振った。

「……あたし、変な力を持ってて……村から追い出されちゃったんです……」

『変な力』

それは、彼女が生まれ付き持つ力で、一般の類いでは『妖術』や『奇術』と呼ばれている。が、村などの辺境の地では『悪魔の力』などと恐れられていたりもしており、瞬はこの力の所為で村を度々追い出されていたのだ。

「……あたし……もう……嫌なんです……」

ポロポロと、目から涙が溢れだす。

「……死のうと思って……崖に向かってました……でも、空腹で倒れ

こうして、瞬はここに住むこととなった。
数日間ぐらいはやはり、雛里が主に対応に困り、何かと四苦八苦した日が続いたが、それも徐々に解消されていた。

そんなある日。

「……この部屋……」

いつの間にか、見知らぬ部屋へと来ていた瞬。そこは、誰かがいた時のままのようになっていた。

彼女の目に映ったモノは、柱に掛けられた漆黒の羽織物。

何故かは知らない。それでも、彼女はその羽織に、触れた。

『よう』

「え……?」

誰かの声が聞こえた。

もう一度、触れてみる。

『よう。初めましてだな。仙鈴、だっけか?』

やはり、声だ。男性の、どこか安心感の持てる、そんな声だ。

『お前は、その力に悩んでいるよな?』

「な、なんでそれを……っ」

『全部伝わって来ている。……、俺は……、そうだな。蒼神と呼んで

くれ』

「蒼神、さん……」

「人には、謎の力を持っているやつだってわんさかいる。俺もそう
だ。異常な身体能力がそれだ』

「……もしかして、『神の御使い』の……」

「そ。まあそれは今置いといてだ。その力の暴走が、お前の悩みの
種なんだから？ 昨日は偶々暴走しなかっただけで、いつまた暴走し
て、人を殺すかわからない』

「……ッ」

「そんなアンタに神からお助け物だ。お前が触れているこの羽織。
これに暴走防止の術式を組んだ。それに加えて、お前の意思でその
力を操れるようにしておいた。さ、羽織ってみ？ 俺はこれで消え
るが、くれぐれも朱里や雛里に怪我させんなよ。じゃあな』

……。

以降、何も声は聞こえなくなった。

パチッ……。

「……」

無音の部屋に、一瞬だけ火花が散り、瞬がこめかみを押さえる。

暴走。

その時が迫っている。

急いで羽織を掴み、頭から被った。

刹那、

「あ……」

急な立ちくらみと共に、瞬は気を失った。

十十十十十十十十十十十

「……は……わ……じよ……な……」

ゆっくりと意識が覚醒に向かう。

「起きましたか？」

水鏡の優しい声。瞬が首を巡らせると、すぐ脇で水鏡が瞬の頭を撫で、朱里と雛里は心配そうにオロオロしていた。

「蒼神さんの羽織。何かあったんですよね？」

その言葉にハツとなるが、口をつぐんでしまう。

「大丈夫。何も訊きません。持ち主の蒼神さんも、きっと許してくれますよ」

この人はどうやら『蒼神』という人物を知っているらしい。それに、この羽織自体が彼の持ち主だと言う。今度訊いてみようかと瞬は思った。

「……あの、この羽織……」

「ウフフ。良い物でしょう？ 蒼神さんのですから、大切にしてくださいね」

笑顔の水鏡に瞬は「は、はい……」と小さく返事をした。

第23話 迷子、保護されるの(後書き)

ア・ト・ガ・キ!

刀海「さて、また新たなるヒロイン登場だな。久しぶり、刀海だ」

水鏡「こちらは初めて出演しますね。水鏡です」

刀海「まずは謝罪。前回は短い上に無断で『ア・ト・ガ・キ!』のコーナーを休んですまなかった。すっかり忘れていた作者を攻めてくれ。俺は悪くない」

水鏡「あらあら。丸投げですね」

刀海「仕方ない。本当に作者が全部悪いんだからな」

水鏡「そう言えば、また新しい方が出ましたね」

刀海「だな。この先会いそうだし。大切にしてくれよ? あの羽織かなりお気に入りだったんだからな」

水鏡「ええ。私も頑張ります」

刀海「……そうだ。新しいの用意しよう」

水鏡「今着ているその蒼いので良いのでは?」

刀海「考えとくわ。それじゃ、予告しようか」

水鏡「次回『第24話 別れ、先延ばしには出来ないの』」

刀海「後少して反董卓連合編だ。腕が鳴るぜ!」

水鏡「お楽しみに」

第24話 別れ、先延ばしには出来ないこと(前書き)

話がおかしくなる前に切り上げた為、かなり見苦しいものとなってしまいました。

次回挽回をはかりたいと思いますので、ご了承ください。

第24話 別れ、先延ばしには出来ないのこと

刀海一行が遠征をしてあつという間に三ヶ月が経過した。

「つてな訳で、帰らせてもらおう」

「妾はもう少しいてほしいのじゃ！」

「無理無理。上からのご命令だから、背くのは如何のだよ」 謁見の間には袁術とその諸侯達が来ていた。

「世話になったな。またいつか、会うかもな」

仮面の下で刀海は笑う。

次は一人一人に挨拶をして行く。

「また会えるかの」

「当然。俺にはわかる」

「私も。勘だけどね」

「……当たるんじゃないかな。それが」

「期待大、だな」

仮面の下でキシキシ、と笑う刀海。雪蓮と祭も頬を緩ませた。

「取り敢えず、俺は洛陽にいつから。またな」

やけにあっさり別れを告げ、奈々の元へと行った。

「さつさと行くぞ。オマエの為にコレ以上出発は先延ばしに出来ねエ
ンだからヨオ」

「うう、だつてえ……」

記してはいなかったが、実は帰還予定日を数日オーバーしており、この原因はまだ帰りたくない駄々をこねる奈々だったりする。

「奈々さん、刀海さんも困ってますから…また会えますよ？」

「まだちよつとお……」

「その『ちよつと』が非常にヤヴァイことなんだがなア？」

困りましたねえ、と周泰こと明命は苦笑いを浮かべた。

「……………あつ、そうだ！ 刀海さん刀海さん」

と、明命は何やら閃いたご様子。刀海は手招きに誘われ、耳を傾けた。

（こつ…かくかくしかじか、なんてどうです？）

（…成功する保証は？）

（絶対です！）

（やってみる価値はあるんだな）

刀海が納得したように頷いた後、一つ咳払いを挟んでから独り言のように口を開いた。

「いやア、俺はあまりガキっぽい奴は嫌いなんだよなア。特に女子が。やっぱ大人な女性の方が好感持てるんだよなア…」

この言葉、明命の言ったモノをまんま復唱しただけである。実にわざとらしい独り言だが……………、

「ッ……………！！」

奈々は見事なまでに引つ掛かり、目を見開いた。

「ちつとも我慢出来ねエ奴はやっぱガキに変わりねエ。そう思うだろ、明命」

「そうですね」

畳み掛けるようなその言葉に「ぐう……………」と唇を噛み締める奈々。若干涙目なのは気の所為だと信じたい。

「……………える」

「ン？」

「帰る……………！！！！！！」

と、奈々が憤慨。

いきなり怒鳴られて刀海は面食らって固まった。

奈々の方はというと、プンスカご立腹のまま間を飛び出してしまうた。

取り敢えずそっちは部下に任せ刀海は向き直る。

「奈々をありがとな。また会おう」
明命は力強く頷いた後、頭を下げる。

刀海は部屋全体を一瞥し、その場を離れた。

＋＋＋＋＋

速足で歩く奈々の背を見て、刀海は深く溜息を吐いた。
取り敢えず追いつこうと脚に力を込めて跳び、奈々の目の前に着地する。

奈々は見えなかったのか、そのまま刀海にぶつかって止まった。
「……取り敢えず、俺について来い。帰る道間違っつから」
ようやくそのことに気付いた奈々は赤面するが、無言のまま頷いて刀海に身を委ねた。
それを確認し、刀海はまた思いつ切り跳んだ。

＋＋＋＋＋

「フフフッ」

「どうした策殿、急に笑いおって」

「ううん。何でも無い。…あああ。行っちゃったかあ…冥琳にも
会わせなかったのになあ」

「仕方ない。また会えるじやろうて」

「ウン…、だけどさあ…」

「？ 何じゃ？」

「…ちよっと変わった状況で会う気がしてならないのよね」

第24話 別れ、先延ばしには出来ないこと(後書き)

今回の『ア・ト・ガ・キ!』は休みです。

では。

第25話 洛陽、紅に沈むのこと

前方に洛陽の街並みが見え始めた。

「……つ、着いた……」

刀海が疲れた表情を全面に出して深く大きく息を吐いた。

現在彼は仮面を取っており、何かシルエットが一回り大きくなっている。

それは、

「……いい加減起きろよな」

人を四人も担いでいるからである。

何故こうなっただかは簡単。

予想以上に時間が経ってしまい、速く帰らないと刀海だけが怒られる。

つてな訳で速く帰ろうと休憩無しで全力疾走。

刀海以外の奈々含む四人の部下が疲労困憊&空腹の為倒れる。

刀海が全員を担いで洛陽まで数日間歩き続けた。

という行程だ。

奈々を背に。女の部下は小脇に抱え、男の部下は可哀想なことに腰に付けた紐にで引きずっている。

哀れなり男よ。

「……ぜってー何か言われるぞ」リヤ……」
やだなあ、と回れ右したい気持ちを抑え、洛陽の街を歩いた。

＋＋＋＋＋

玉座の間。

「たーだーいーまー、っと」
ドサドサドサドサ。

伸びた者を適当な場所に放って、董卓こと月に向き直った。
膝を着き手を前で合わせる。

「蒼 夜宏。只今帰った」

「……遅い!」「」

脇から三人が身を乗り出す。

「刀海! なんで予定日をこんなにも過ぎたりしてるの!? ボク
はもっと早く帰るように忠告したよね!？」

「貴様、わたしに報告もナシに出ていったな!」

「トーヤん! 勝手にいのうなられっとメツチャ困るんや!」

「……後二人は……欲望……丸出し……」

「大人気ないのです!」

「あははは……」

恋、音々音、月は言い争う四人の蚊帳の外で様子を見守った。
また楽しい毎日が始まる。

＋＋＋＋＋

かに思われた。

「……………恨んでやる……………」
一週間だけが。

刀海が向かう机には山が三つ分出来上がっている。
詠曰く、『予定日を大幅に過ぎた罰』だそうだ。

「ほら、さっさとやるのです!」
わざわざ監視に音々音を辺り、かなり嚴重なようだ。

因みにその音々音は大いに寛いでいやがる。仕事しろよオイ。

「……………チクシヨウが……………」
仕方無しにバリバリ仕事を進めることに。

それからあつという間。

現在二つの山を消化し、現在の三つ目も後三分の一にまでなっている。

外から差し込む光は赤を帯び、刀海の部屋を少しファンタスティックに照らした。

寛いでいた音々音はいつの間にか椅子で寝ており、まだ幼さバリバリのあどけない寝顔を曝していた。

変な描写ですが、別に刀海が疾しいことを考えている訳ではないので悪しからず。

刀海は苦笑し、その辺の布をかけて部屋を出た。

サボリじゃないよ？

+++++

「刀海、仕事は？」

なんと間の悪いことだ。

廊下で詠とばったり出くわした。

「ああ、あと少しだ。今はちょっと休憩挟んでるトコ。序でに久しぶりの洛陽を眺めようと屋上に向かってた」

実に二ヶ月とちょっとぶりの洛陽だ。故郷みたいに感じる街を眺めるくらい許してくれる筈。刀海はそう思う。

「ふう〜ん…そう。今日中には終わらせてよね。かなり量が貯まってるんだから」

「へいへい。わーってますて」

まあでもそこは刀海。適当な生返事(?)を返し、屋上へと歩を進めた。

十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十
十

道中霞に酒を分けてもらい、珍しく風の無い屋上へと出た。こういう天候、悪くは無い。

「ま、酒はまだ後で、っと……」

取り敢えずは暫く景色を眺めようと、城壁に腰を下ろした。

眼下に広がる景色は、賑わう夕暮れ色の大通り。野菜を吟味する

者や少し早めの夕食をとる者。しまいには早くも酒で騒ごうとする者達までが見える。

「平和だなあ……」

思わず、そう呟いた。

記憶を振り返れば、戦うことばかりだったような気がしないでもない。でもやはり、平和にのんびり過ごすより戦って闘って戦い抜く時間の方が多かった。

仕方がないことだと思う。

神様に飛ばされたトコロがこんな戦乱の世のような場所なのだ。後漢の時代が前世のように平和な訳がない。

忘れかけていたが、改めて転成者であるんだと思った。

今や『天の国』と称される前世。残して来た物は、そう多くはない。

やはり、刺激が少なかった。しっかりと、確信している。

だからこそ、今が楽しい。そう思った。

「……カツ、何感慨に更けてんだらうな……らしくねえ……」

これには何かしらの理由があるんだらう。考えずにはいられない。刀海の手思考が止まった。

「……『反董卓連合』……」

正史によれば、洛陽で董卓が悪政を働き、それを袁紹が放った激文によって出来る反董卓連合軍との戦だ。

しかし、今の董卓　月が、悪政を働いているだらうか？

否、真逆。民の為になる、寧ろ世にあるべき正しいやり方だ。

が、ここは正史ではない。

『外史』だ。

甘い考えが通用するなど、全くもって有り得ない。

「潮時、だな……」

太陽が、地平線へと沈む。

決戦の時は、刻一刻と迫って来ている

。

第25話 洛陽、紅に沈むのこと（後書き）

ア・ト・ガ・キ！

刀海「さ、毎度の如く、アトガキの始まりだ。今日のゲストは…、」
詠「ボクがやらせてもらうよ」

刀海「……あれ？ 恋を迎える予定じゃなかったっけか？」

詠「月の名に恥じぬよう、ボクがきっちり監視する為に急遽変わってもらったの」

刀海「オイ作者ア！ テメエ俺に何も言わねえで予定変えてんじゃねえぞオ！」

キ『マジさーせんしたあ！（ガクブル×2）』

詠「……じゃあ何、ボクじゃ不満だってワケ？」

刀海「いや、あのー……冗談だからね？」

詠「冷や汗ダラダラね」

刀海「アハ、ハハハ……気の所為じゃね……？」

「……………」

刀海「ささっ、早く次行くぞ！」

〔今日の企画〕

- 1 第二章終了報告。
- 2 第三章予告。
- 3 現状整理。
- 4 次回予告。

1 第二章終了報告

刀海「さて、まずは 1。第二章終了報告からだ。こっからは、またまた予定を変更して、董卓軍将全員でお送りするぞ。」前に名前を表示するからな」

月「董卓こと、月です」

詠「ボクも一緒にね」

刀海「へい。つつう訳で、第二章お疲れー」

月「お疲れ様でした」

詠「お疲れ様」

霞「にひひっ、お疲れさんっ」

華雄「ご苦労だった！」

恋「……おつかれ」

音々音「よくやったのです！」

刀海「まあ、こうして洛陽の皆と過ごしてきた訳だ。作中では、第二章始話〜今話まで、約二年近くたったことになってるらしい」

キヨン「第一章は十年以上使っちゃったけどね」

刀海「……どっから湧いて来た？」

キヨン「いやあ、何水みたいな存在感の薄いモンみたいに言っのさあ」

刀海「リアルにそうだろ？」

キヨン「

……」

刀海「あ、鬱になった」

霞「トーヤン…ちょっとやりすぎちゃっくん？」

刀海「無問題」

華雄「根性が足りん！ わたしならば耐えられるぞ！」

詠「まあ理解出来てないからね」

音々音「自覚が無さすぎるのです。ちつとは勉強するべきなのです」

刀海「二人も相当だな」

月「アハハハ……」

恋「……？ ここ、笑うところ？」

刀海「全くもって違うからな！？」

華雄「？」

刀海「…まあいいか。次に移ろう」

2 第三章予告

刀海「さて、いよいよ大舞台のなる第三章だ。ここでは予告するぞ！」

月「まずはこちらをどうぞ」

曹操の元に、一通の文が届く。

「華琳様、これを……」

「ありがとう桂花。下がって良いわ」

「はっ」

荀イクからソレを受け取り、差出人を確認する。

「袁紹から？ 珍しいこともあるものね」

曹操はその文に目を通した。

「ん？ 私にか？」

執務室で仕事に勤しんでいた周瑜に文が手渡された。

差出人には『袁紹』の文字。

読む必要性はあまり無いかと思われたが、取り敢えず目を通しておくことに。

ハア、と一つ重い溜息を吐いて、周瑜は文を読み始めた。

「……これは……、ッ……」

「名は劉備。字は玄德だよ。よろしくね」

「我が名は関羽。字は雲長と申す」

「姓は韓、名は欄。字は桜千です」

「鈴々は張飛、字は益徳なのだ！」

「名は趙雲。字は子龍だ」

「しよ、諸葛亮 孔明です」

「……鳳統、士元でしゅ……あう……」

「仙鈴。字は赤夢です」

「ウチは馬超。字は猛起さ！」

「アタシは馬岱。字は白瞻だよ」

「名は黄忠。字は漢升です。よろしくお願いしますね」

此処に集いし将達。彼女らもまた、新たなる舞台へと駆け上がる。

「嫌に騒がしいな」

刀海が顔を顰めて椅子に体を預ける。

窓から見える青空は何も変わりはない。

はて？ では一体何が？

「不幸は歩み寄って来る……。俺のが当たらなきゃ良いんだけど、なあ……………」

不幸とは、向こうから歩み寄って来るものである。刀海はそう考えている。きつとこれも、そうなんだろう。でも、この胸騒ぎはそうであってほしくない。

「奈々」

「何々い？ 呼んだあ？」

ヒョコ、つと天井裏から奈々が顔を出した。満面の笑みなのは刀海に呼ばれてからののだろう。

「洛陽外の情報を根こそぎ集めてきてくれ。なるだけ迅速に頼む」「りょーかいッ！ 行ってきまーす！」

「……………そろそろ、だな……………」

新たな火種は、既に撒かれた。

あとは、実を摘み取るだけだ。

。

刀海「ほほう……」
月「……なんだか楽しそうですね」
刀海「大舞台だからな。気合い入れなきゃ乗り越えらんねえよ」
恋「恋、頑張るっ」

3 現状整理

キョン「さて、ここからは刀海&董卓軍メンバーはお休みして、自分がサブタイトル通り現状整理といきます」

蒼神 夜宏…刀海

年齢は中年。でも不老不死のためかなり若々しく見える。

その他メンバー。

全員が十五歳越え。

キョン「……………まあでもそこまで言うことはありませんでしたね
(笑)。次は彼女達による次話予告です」

4 次回予告

愛「お久しぶりです。愛と申します」

瞬「ど、どうも……………」

水鏡「緊張せずとも大丈夫ですよ」

瞬「は、はい……………」

水鏡「愛さん、瞬さんを頼みますね」

愛「承りました」

瞬「が、頑張りますッ」

愛「この……………何ですか？ 『こおなあ』？ はですね、何やら次回
の予告をしるとのことなんです」

瞬「…何かやらされた感が見える言い方ですね……………」

愛「実際やらされてますからね」

キョン「……………何故だろう。スゴい殺気を感じるよ……………」

愛「さて、次回予告です」
瞬「『第26話 武将、集うのこと』。いよいよ新章突入です！」

お詫び。

この度は、無駄な後書きの方ばかりに力を入れてしまい、申し訳ございませんでした。

この新章は作者として特に力を入れていきたいので、更新は更に遅くなり、一、二ヶ月に1話が限界になるかもしれせん。
本当に、申し訳ございません。

また次回お会いしましょう。

では。

第26話 武将、集うのこと く壱席目く

ここは、どこにでもある普通の村。人々は決して贅沢とは言えないが、今を精一杯。そして一生懸命に生きていた。

村の大通りにはそれなりの活気で賑わい、廃れてはいない元気な村を表していた。これが平和といったモノなのだろう。

韓欄 愛は思った。

「…ホツとする雰囲気ですね…。…懐かしく感じます」
「私もだ」

その言葉に隣を歩いていた関羽こと愛紗も頷いて同意した。

彼女らがここにいるのは旅の宿泊先を探しているからだ。

『旅』というのとある人物を捜す為。以前はかなり有名で伝説になりかけた人物でもあったのだが……。ここ十年近くは噂といった情報が全く以て皆無。つまり何も無いのだ。

師匠が何も行動を起こさないのはおかしいと愛紗は思う。『師匠』という『彼』は、ある一種の正義の為に大陸を駆け回りそんな人なのだ。

「……どうかしましたか？」

「え、あつ、いや……。なんでもない、ぞ…?」

ポーツとしていたのを見て、愛が愛紗の顔を覗き込んだ。慌てて顔を逸らす。

愛の蒼い瞳を見ていると、何か心の奥底を見られているように感じてしまうのだ。

愛には愛紗が全くと言っていい程（実際全く）何を考えていたかを見ることは出来ない訳で……。小首を傾げるばかりであった。

「山賊のお通りだーいー!」

「「「「「おおー!」」」」」

「「!？」」

暫く歩いていると、後ろから少年達が勢いよく走って来ていた。思いの外驚いた二人は慌てて道の脇へと避けるが、足がもつれて互いに転倒。愛だけが顔から家屋の壁に突っ込んだ。

「痛た……。愛、大丈夫か？」

「ふあい、なんほふあ……。はい、なんとか……。）」

若干涙目で鼻を抑える愛。まあ大丈夫なのだろう。鼻血も出ていない……。と思われる。

「……。鼻血は？」

「……。出てまふ」

「……………」

仕方ない、と愛紗は布を取り出して差し出す。愛は「…ありがとうごふあいまふ」とそれを鼻に当てて止血した。

「全く。教育が成っていない者達だ！」

愛紗は不機嫌そうに服の埃を払った。不機嫌、というよりはもう憤慨に近いかもしれない。

「あらま讓ちゃん達、大丈夫かい？」

と、そこに一人の老人が現れた。髪は見事な白髪だが、未だ元気そうな振る舞いを見せている。

「あの子らは何の罪も無いんじゃ。ただ遊んどるだけ。確か…、『山賊ごっこ』と言ったかの？ まあ度が軽く過ぎておるのじゃ。たまあに問題を起こしたりしとるからのお……。いやはや、周りからは迷惑極まりないと苦情苦情の毎日じゃ」

もう疲れたと言わんばかりに老人は溜息を吐いた。

言動からしてこの村の村長なのだろうかと思っただが、今は置いておく。

「少々教育が必要ですね」

美少女が鼻血を止める為の布を鼻にやりつつ刀の手入れを行う、
というのはかなりシユールな光景だ。愛紗も口には出来ない微妙な感
覚を味わい、頬を引きつらせて苦笑する。

「ま、まあ確かに。あの行動は私もどうにかせねばならんと思っ
ていたところだ」

苦笑混じりに賛同する愛紗に「そうですねえ」と愛は目が笑って
いない笑顔(?)を向けた。

『前までこの村にも孤児院があつてねえ。院長さんがいたんだ。で
も、その人が亡くなってからあの子(張飛)がああなったのさ。悪
気は無いんだろう。仕方ないんじゃないかねえ』

食事屋の女将曰く、そういうことらしい。確かに、事情がある
のであれば仕方ないかもしれない。

が、

(それを放っておくのも放っておく方だ)

何もせず、ただ野放しにしておくのはいただけない。これから成
長していく上であのままではいけない。

「明日、彼らの方を片付けよう」

「そうですね。夜も遅いですからね。…フフ、フフフ……」

少し愛のことが心配になってきた愛紗であった。

+++++

翌日。

取り敢えず情報収集からということ二人は村内を回った。情報、
といいつつ殆どは愚痴だったが……、

「子供達を野放しにし過ぎですね。いくらなんでも異常です」

愛からは些かトゲのある厳しい意見。やはり根に持ってるらしい。

と、不意にその本人が顔を上げた。

「…来ましたね……」

「あ、おお……」

若干愛のトーンが下がったのは気の所為だと思いたい愛紗。やはり根に（ry

今日も今日とて村中を駆け回った『鈴々山賊団』を、愛、愛紗がこっそりと尾行し、村から少し外れた場所にある小屋へと辿り着いた。

「……出番はまだですかね？」

「愛、その刀を閉まってくれ。こっちまで斬られそうだし……」

「つれないですね。最近斬ってなかったものですから腕が鈍って心配ですし、天斬ソラキリも不満ばかり言っていて困っているんです」

「さりげなく物騒な発言は控えてくれ、頼むからどうしてこんな人になってしまったんだろう？」

やはり自分の責任なのか、と想着てしまうと凄く心が重くなった。

「……おや、解散してみたですね」

「よし。じゃあ、行くぞ」

足音を殺し、小屋の扉の両側に位置取る。合図と同時に、愛紗が扉を開けて愛が一瞬で滑り込む。刹那、目を見開く。

その視線の先には、振り上げられた武器。

愛は一瞬の見切りで刀に手を掛けて抜刀し、勢いで持って弾く。すぐに後退しながら再び納刀してから油断なく睨む。

「でりゃあああああああ!!!!!!」

武器を振るう少女は更に踏み出して来て、真上から振り下ろす。その桁違いな速度と威力に一瞬驚いた愛は捌くのではなく、後ろに文字通り跳んだ。

バックステップではなく、宙を舞うように一回転。

しかし、そこは崖。五人分はあるう高さから落ちた愛は、これまた音を殆ど立てずに綺麗に着地した。

少女もそれを追ってピョンと飛び降りる。

その様子を間近で目撃した愛紗は絶句。少女の腕力もそうだが、あれに反応して驚く程綺麗な立ち振舞いをする愛は更に凄い。

持っているモノが根本的に違うんだな、と愛紗は感じる。獲物を構えたことは愛紗の方が経験が多い。しかし、才能の面では明らかに愛が上だった。結局、模擬戦をしても一勝も勝てなかったのだ。

「っと、そんなことしてる場合ではない！」

愛紗も二人に続くように飛び降りて、少女の後ろに着地。愛と挟むように武器を構える。

が、愛はそれを無言で制止するようすがめた。

一瞬迷った愛紗ではあったが、それに頷いて同意。最低限の構えで見守ることにした。

それを目で確かに確認。愛は刀に架けていた手を木刀『獅刃』に持ち変えて今度は正眼に構える。最も扱い易く、最も安定した最高の技を発動できる構え。抜刀に向かない木刀の一番高い性能を引き出せるのだ。

愛は動かない。動くのは得策ではない。寧ろ、この構えはあまり動かない。

片足での体重移動が基本の構えでは不安定だ。それにこれは前に出るのだけに特化した構えであり、決して万能ではないのだ。

相手の出方を如何に早く分析・反応し、それに対応して如何に最高の状況を作り出すかにこの構えはある。だが、最高の状態へ持っていくのが大変な分、そのツケは大きい。

「行くのだ！」

おおおおおおッ！！！！ と雄叫びを上げて重く鋭い斬撃の一閃。

愛は、するりと回避。まるで風に流される布のように、一撃を危なげ無く、それでいて紙一重で避けてしまふ。

フウォンッ、フウォンッと豪快に振り抜かれる力感溢れる攻撃。威力は相当。一撃当たただけで卒倒ものだ。

しかし、

（充分に見切れる！）

愛は確実に、絶対と言えるほど見切っていた。

短い呼吸で足を踏み出し、低く、低く前へ。

真上から来る一撃を目の端にしっかりと捕らえながら、木刀を水平に。その勢いのままに突貫。

少女は何とか身を捻るがそれで平行感覚が狂って体制を崩す。その隙を見逃す筈がない愛が見えない足捌きで少女の真後ろを陣取り、その首筋に打ち身を当てた。

「……っあ……」

いきなり力無く膝を着く少女。足の力と言う支えを無くした彼女は地面にゆっくりと倒れ……、

「……っ。愛、手加減は？」

……、倒れる前に愛紗に支えられた。

「当たり前じゃないですか。そもそもしてなかったら木刀なんて使えませんし、本気ならば今ごろ首は胴体と一生お別れしてますよ」

「……まあそれもそう、か……」

相変わらず舌を巻いてしまうような技術だ。そう思わざるを得ない、それが愛なのだろう。

取り敢えず少女を休ませようと、二人は再び小屋へと入るのだ。た。

「……ところで愛紗様。あなたは何かされましたでしょうか？」
「それは言っなどいものだろうか……」

キヨン」……………（チーン）」

キヨン が ログアウト しました。

愛紗（……………愛は絶対に怒らせないようにしよう……………）

愛「さて、愛紗様がまたまた空気になりかける前に進めてしまいましょう」

愛紗「うう……………愛、お前本当に容赦無いんだ……………」

愛「それが私です」

愛紗「胸を張って言うな……………」

愛「切り替えましょう。ついに始まりました第三章。今回からは洛陽を離れて反董卓連合までのお話になります」

愛紗「予定では拾話以上を“目指す”らしいぞ」

愛「目指す、ですか……………？」

愛紗「うむ。台本にはそう書いてある。大方、まだまとまり切っていないんだろう」

愛「仕方ありませんね……………。まあ良いです」

愛紗「では次回『第27話 武将、集うのこころ式席目』」

愛「またお会いしましょう」

キヨン『そうそう。第三章だけど刀海は出ないと思うよ』

刀海『……………地獄に案内してやる』

キヨン『ちょ、ま、なんでここにいざやあああああ（プチッ）

……………』

ではまた次回！

第27話 武將、集うのこと 〱武席目〱(前書き)

何故少ないかって？

戦闘描写が無いしアニメ二つに分けちゃったからだよ！

…………… スミマセン

第27話 武將、集うのこと 〱武席目〱

シュツ シュツ 。

薄暗い部屋。明け方の小屋の淡い朝日に染まる一室の中に小さな音が響く。

音源は一人の少女が行う作業の手元。

鋭い光沢を放つ少し反りのある武器 刀を砥石といしを使って手入れ

しているのだ。

一通り終わった刀を持ち上げると丁度朝日と重なる。独特の金属

光沢に光が反射して少女の顔を明るく照らした。

「今日も、良い天気になりそうです。…それに、この村ともお別れですね」

少女 愛マナは満足気に頷くのだった。

+++++

一昨日おとといのことだ。

少女を見事打ち負かした愛達は彼女の小屋へと滞在し、その後目覚めた彼女と一悶着あったのだがそれを愛の有無を言わせぬ迫力で黙らせたのだ。もう『山賊団』なることもしないと（これもやはり

愛の迫力により）約束し、村の抱える問題は解消された。

昨日は村を謝罪回りの所で、愛や愛紗も一軒一軒ついて回った。意外にも疲れたのは割愛。

しかし、このお陰で全て解決。愛達も村人から感謝され、タジタジとなった。

今日はそれからまた翌日。

愛と愛紗はこの村を発^たとうとしていた。

「この度はお世話になりました。わざわざ差し入れまでいただいてしまい……」

「いやいや、こちらこそ。問題も解決していただきましたし……、」
愛紗と村長が挨拶を交わしている間、愛は少し離れた高い櫓^{やぐら}から村中を眺めていた。

中には『山賊団^{ごっこ}』に混ぜられていた子供達の姿もある。元気そう^そで何よりだ。

「愛、終わったぞ」

下から愛紗が手を振りながら呼んでくる。「了解しました」と短く答え、建物三階分はあるう高台から躊躇^{ためら}いなく飛び降りた。

なんたる暴拳と目を見開く愛紗。しかし、その期待（？）を裏切るように愛は危なげなく綺麗に着地した。もう完全に異常だ。

「では、行きましょうか」

「……そうだな」

しれっとした態度の愛のあとに続く。

なんだか最近、彼女の心配をするのが馬鹿らしくなってきたと思う愛紗。自分以上に凄^{すご}い愛がヘマをやらかすなんて到底あり得ない訳だ。心配するだけ無駄である。

「フッフ」

「?」どうかされましたか?

後は、彼女がどれだけの覚悟を持っているかどうかなのだ。

「鈴々は……、」
数瞬、僅かに黙る張飛。

だが、

「鈴々は二人と一緒に行くのだ！」

決意を込めた大きな瞳で二人を見る。

もう、全て覚悟は出来ている。

辛い旅になろうとも。

例えこのまま旅先で野垂れ死のうとも。

二人の為に、一生懸命に、ついて行くことをしかと心に誓ったのだ。

「鈴々は張飛、字は益徳なのだ！ 鈴々って呼ぶのだ！」

こうして、また新たなる仲間が出来た。

『旅は道連れ』

なんとなく、『師匠』の言っていることがわかった気がした愛紗だった。

村を出て数日。

「桜、ですか」

「すっごく綺麗なのだ!」

「鈴々! はしゃぎ過ぎるな!」

賑やかな喧騒で桜並木を歩く三人組。

改めて、これから始まるのは恋姫達の住まう戦国のお話。
彼女達の無双を、とくとご覧あれ。

第27話 武將、集うのこと 〳武席目〳（後書き）

ア・ト・ガ・キ！……………は作者のモチベ的に辛いのでお休みで…
… m () m

第28話 武將、集うのこと 〱 参席目〱 (前書き)

ごめんなさい。

これが限界でした……。

第28話 武将、集うのこと（参席目）

「見えたのだー！」

鈴々が少し高い丘から下を見下ろすと、水田に挟まれた道の先に集落が見えた。

後ろから愛と愛紗が追い付き「丁度良いな」「ようやく休憩出来ますね」とごちる。

「鈴々が一番乗りなのだー！」

「あ、こら！ 待て鈴々！ 勝手な行動をとるな！」

「全く、二人共はしゃぎ過ぎです」

坂を勢い良く駆け降りて行く鈴々を愛紗が慌てて追いかけて、愛はやれやれと首を振りながらゆっくりと走りだした。

三人共、仲の良い義姉妹である。

出会って数日後。

すっかり打ち解けた三人は旅を順調に進め、次なる村へと来ていた。

見た目は平々凡々。それなりの村作りがされており、自治もそれなりと言った平均的な、つまり、普通な所だ。

「…あつ、と。その人、ちよつと良いかな？ もしかして最近噂の黒髪の子盗狩りと 烈風の斬滅者 だったり？」

門をくぐって中に入ろうとすると、門兵の一人が声をかけてきた。「ま、まあ自分から名乗るようなことはせんが、そう呼ぶ者もいるなあ」

「はあ、それって私のことなんですか……」

その言葉に愛紗は照れてしまうが愛は真に受けずに「そんなものがあるんですね」と軽く驚いている。そもそも彼女の場合は二つ名に興味が無いので仕方無いのだが。

「いやあ、黒髪 of 山賊狩り と言えは絶世の美人だし、烈風の斬滅者 は数百年に一度の美女だって言うからめばしい人には声をかけるようにはしたんだが……如何せん、噂は所詮噂。頼りにならないって訳だ」

ピキッ。

「少々お待ちを。主を呼んできます」

「了解いたしました。あと少し“お話”がございますので後でお時間いただけますか？」

自分でよければ、と門兵はタタタツと奥に駆けて行ってしまった。

「お姉ちゃん達、綺麗で有名なのだ！」

「黒髪が、な……」

「フッフ、早く来ませんかねえ…負負負フッフ負負負負負負負負負負負負負フッフ負負フッフ…」

この後門兵がトラウマになるほどに震え上がったのはわかりきったことなので割愛とする。

+++++

太主の家に通された後待たされると、二人の人物が来た。

一人は赤髪。もう一人は朱槍を持った水色の髪 of 女性だ。彼女からはただならぬ雰囲気を感じる。

「この一帯の村の太主を務める公孫贖だ。そしてこちらが客將の、」
「趙雲子龍と申す」

ペコリと頭を下げる二人に対し、愛と愛紗も頭を下げ、鈴々もそれに習ってあわせる。

「私の名は関羽。字は雲長」

「鈴々は張飛って言うのだ!」

「韓欄桜千と申します」

それぞれの自己紹介を終えて本題に入

「時に関羽殿」

「なんだ?」

「えらく歳の近いお子様をお持ちのようで……」

「なッ……ちっ違う! これは別に私の子などではなく、姉妹の契りを結んだ故……!」

「ほう……して、どちらが攻めでどちらが受けですか?」

「むう……、鈴々はどちらかと言うと攻めなのだ」

「鈴々! わかってもないのに勝手なことを言うな!」

「私は圧倒的に攻めですね。因みに彼女は受けでしてその淫らな」

「愛! お前はわかってて言うてるだろう!」

「おや、バれてしまいましたか」

「ツ~~~~~~~~!!!!!!/!/」

「韓欄殿とは気が合いそうですね(ニヤニヤ)」

「私も、趙雲様とは通じる気がいたします(ニヤニヤ)」

二人は完全な攻めであった。

第28話 武将、集うのこと ～参席目～ (後書き)

しばらく『ア・ト・ガ・キ!』はお休みです。

次話は……来年になるかなあ……。

集計結果

さてさて。

アンケートの回答はもうこないだろうと言っちょつと勝手な判断でスミマセンが集計結果を発表します。

まあアレなんですよね。これ以上期間伸ばすと熱が冷めそうなんで早く書きたかったのが正直な感想でその裏付けには受験で真面目になる前にせめて一本は仕上げたい本音。

それより集計結果を提示しましょう。

1、 2・5票

2、 7・5票

他、 0票

よって、アンケート結果は『2、その原作をぶち壊す!!』に決定しましたー！

どんどんぱふぱふー

愛「皆様、投票ありがとうございました」

奈々「作者は早速執筆に入るってさ！」

瞬「長らくお待たせしてしまい申し訳ございません！ あともう少しだけ、お待ち下さい！」

さて。今回はオリジナルヒロイン（通称“オリヒロ”）の三人に来ていただいています。

皆久しぶりですね。

あ、因みに本編には全く関係してませんので。

愛「最近はお番が多いですがね」

奈々「いーなー」

愛「ダメですよ奈々様、そういうことを言っっては。瞬様は本編ではまだお番が確か一回ぐらいしか無かった筈です」

グサッ

瞬「はうッ!？」

瞬に聞こえるように言った辺りはやっぱりドSなんだね……。

愛「どえす？ それはなんですか？ 強いのでしょうか？」

……アレ？　もしかしてアレですか？　バトルジャンキー 戦闘狂に感染しました？

愛「意味が不明です。言葉の説明を要求します」

奈々「ねーねー、ばとるじゃんきーってなにー？」

瞬「ええっ！？　あたしに聞かれても……」

あー、まー、アレだよ。戦闘大好きー！　狂うぐらい好きだぜー！
な人のことだよ。

愛「ほう……」

瞬「……愛さんの目の光が消えたよ……」

奈々「??　戦闘って楽しいじゃん？」

あ、まあそれはそうなりちよっ！　愛さん愛さん刀をこっちに向けてないで！

愛「絶対嫌です」

即答！？

愛「私をばとるなんたらにした罪、思い知りなさい！」

うそーん……。

愛「真斬ー!!」

「愛」.....

.....「

.....何露骨に嫌な表情で引くの？ 特に愛、アンタの所為だろうが。

「愛」はて？ なんのことでしょっ？」

.....いつか恥かかせたる。ギリギリR - 18だ.....。

瞬「.....

.....「

.....すみません瞬様。アナタに引かれるのが一番傷付くんですよ、自分。

「愛」この人は無視していきましょう。いい加減続きも書かせないといけませんし」

瞬「.....何故か愛さんが一番しっかりしてるんですよね.....」

奈々「じゃあ今回はここまでだよ！」

では皆様、次回『第29話 武将、集うのこと ～肆席目～』でお会いしましょう

「」ではでは「」

番外話 武将、紹介すること（前書き）

要望があったので軽く作成しました。

番外話 武將、紹介すること

韓欄 桜千

(カンラン オウセン)

真名：愛^{マナ}

女性

武器：『木刀』“獅刃”

柄に“獅刃”と銘打たれた純白の木刀。見た目はまんま木刀だが、頑丈さは異常。

『刀』“亜真刀”

全て漆黒に塗り潰された刀。刃は反比例して白銀で、刀海が鍛え上げた逸品。

容姿。

茶髪混じりの艶のある黒髪を肩辺りまで伸ばして適当に切っている。瞳は蒼。

身長は愛紗らとあまり変わらない。

刀を持ったのは愛紗と出会った時が初めてだが、その時から異常な力の片鱗を見せ付ける。

口調は常にですます調。やたらと人にちょっかいを出すのが好きなサド。

旅の途中、同じ目標の愛紗と出会い、共に“ある人物”に会いに行こうと目指す。

鈴々に出会ってからは（いつのまにか）姉妹の契りを（無理矢理）

結ばれ、三人の内の長女的存在に。

武の才能はあるが、開花するのはまだ先のようだ。

* * * * *

星南 翔葉

(セイナン ショウハ)

真名：奈々(ナナ)

女性

武器：鎖鎌

自分の身長半分程の刃が四枚“卍”型に付いた鎌。

その長い柄の端には頑丈な鎖が付いており、それらを自在に操って攻撃する。

容姿。

新緑若葉色の髪を地面スレスレまでポニーテールにしている。長いのはそこだけで他の部分は意外と短め。瞳は黄色。

身長は近い例で言えば朱里や雛里と変わらない。

一言で言えば天真爛漫。子供っぽく刀海によく懐いている。

こんな成でも副官だったり。仕事は頭がアレな為任されていないが。

強さは刀海が認める太鼓判付き。

* * * * *

仙鈴 赤夢

(シエンリン セキム)

真名・瞬^{シュン}

女性

武器・天魔術

先天性固有能力。己の中の魔力を使って現実を書き換える力。

今までは暴走に悩まされていたが、現在は羽織のお陰で自在に操ることが出来る。

容姿。

燃えるような赤い髪をセミロングに。瞳はオレンジ。気が強そうと思うが、軽くタレ目気味（あくまで気味）なので少し静かな印象がある。

常に刀海の漆黒の羽織を着て“天魔術”の暴走を防いでいる。じっとしている限りは普通の少女だ。

身長は愛らと変わらない。

番外話 武将、紹介すること（後書き）

何かありましたからメッセージや感想にて受け付けております。

ではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095o/>

真・恋姫†無双～無敵の神の御使い～

2011年10月1日12時05分発行